

# 第11回企画展「極秘機関『陸軍登戸研究所』はこうして明らかになった —登戸研究所掘り起こし運動30年のあゆみ—」記録 展示内容解説

塚本百合子

明治大学平和教育登戸研究所資料館特別嘱託学芸員

## はじめに

2020年に開館10周年を迎え、当館開館までのあゆみを今一度調査し記録することを目的とし、本稿の基となる第11回企画展を企画した。40年近くにわたり川崎市民、高校生そして元登戸研究所勤務員とともに登戸研究所研究に携わってこられた渡辺賢二氏（当館展示専門部会委員）より登戸研究所勤務員のOB会「登研会」資料の提供を受け、元登戸研究所勤務員自身の登戸研究所掘り起こし運動についても今回、光をあてることができた。また、明治大学に保管されていた登戸研究所に関する資料についても今回初めて調査を行い、当館が開館するまでのあゆみを大学資料からも紹介することができた。

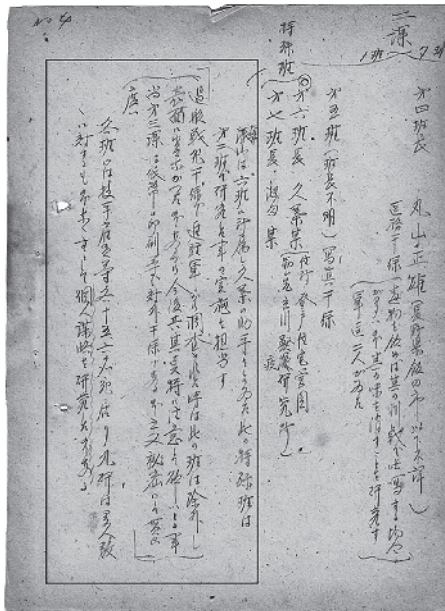
なお、ここで紹介している資料のほとんどが、登戸研究所資料館公式Webサイトの「イベントの記録」で見ることができるので、特に文書資料はこちらもあわせてご参照いただきたい。

## 1. 登研会の発足と「登戸研究所跡碑」建立

### (1) 終戦とその後の元登戸研究所関係者

終戦となり、登戸研究所関係者もGHQの訊問を受けた。帝銀事件『捜査手記』<sup>(1)</sup>（第1図）からは、いわゆるBC級戦犯にあたる罪に問われることを恐れ、GHQに第三科の活動（偽造紙幣謀略担当）と第二科第六班（風船爆弾に搭載する予定だった生物化学兵器研究開発担当）については証言していないと語る山田桜（第二科科长・技術大佐）の姿を認めることができる。しかし、元所員で戦争犯罪を問われたものはいなかった。なぜならば、米国と元所員の間には「ギブ・アンド・テイク」の関係が築かれ、1950年頃より元所員の一部は米国の求めに応じ、米海軍横須賀基地内で米国の秘密戦に携わるようになったからである。戦犯にはならないこと

がわかった元所員らは、徐々に登戸研究所で培ってきた自身の研究成果や作戦の功績を世間に示すようになる。第1表に登戸研究所関係者の体験記などが掲載された雑誌・書籍一覧を示す。風船爆弾関係者や偽造謀略関係者は登戸研究所関係者の中では最も早い段階である1950年代には体験談などを発表している。戦犯に問われないことがわかったからである。まず、1951(昭和26)年初頭には風船爆弾開発協力者の一人である高田貞治が風船爆弾について詳細に雑誌『自然』で発表している。また、偽造紙幣謀略機関「阪田機関」の機関長だったさかたしげもり阪田誠盛は1949年に発生した密輸事件「海烈号事件」<sup>(2)</sup>で検挙され、米陸軍第八軍司令部による軍事裁判で禁固5年・罰金5,000ドルの判決が1950年6月に出るも<sup>(3)</sup>、1951年12月には在日兵站司令部の「クリスマス恩赦」で釈放<sup>(4)</sup>され、その1年後である1952年には「香港謀略団」(雑誌『話』10月号、出版社不明)において自身の蒋介石政権との和平工作にまつわる謀略活動の功績を発表している。



朝山は〔第二科〕六班に所属し久葉の助手をしていた 此の特殊班は  
 第二班〔毒物合成等担当〕で研究した事の実施を担当す  
 「過般戦犯関係で進駐軍から調査された時は此の班は除外し  
 表面は出さなかつたのであるから今後共其点特に注意して欲しいとの事  
 尚第三課〔科〕は紙幣の印刷等で対外関係があるので之又秘密にして貰い度い」

第1図 帝銀事件『捜査手記』別巻より山田桜供述箇所 1948(昭和23)年4月14日帝銀事件捜査員作成。右は山田桜が刑事に話した内容より画像囲み部分を書き起こした。〔 〕内は著者補足事項。(帝銀事件再審弁護団所蔵)

第1表 「登研会」が発足するまでの登戸研究所関係者の体験記などが掲載された主な雑誌・書籍

年代	内容	著者または取材対象者	旧所属
1951(昭和26)年1月~3月	「風船爆弾」(雑誌『自然』, 中央公論社)	高田貞治	風船爆弾開発協力者 (第八陸軍技術研究所, 少佐)
1951(昭和26)年12月	「風船爆弾の気象学的原理」 (雑誌『地学雑誌』60-4, 中央公論社)	荒川秀俊	第一科囑託(中央气象台)
1952(昭和27)年10月	「香港謀略団」(雑誌『話』10月号, 出版社不明)	阪田誠盛	阪田機関長, 偽造法幣流通の実務責任者
1956(昭和31)年12月	「準備された秘密戦」(雑誌『週刊読売』臨時増刊号, 読売新聞社)	岩畔豪雄	軍事課長, 偽札工作(杉工作)の総責任者(少将)

1959（昭和34）年8月	「日本のスパイ廠第九技研：初めて明らかにする秘密新兵器の全貌」（雑誌『週刊現代』8月30日号，講談社）	取材対象者：草場季喜，八木秀次など	第一科科长（少将），風船爆弾開発の協力者（嘱託，气象台）
1961（昭和36）年11月	「風船爆弾 そのアイデアと威力のすべて」（雑誌『丸』11月号，潮書房）	草場季喜	第一科科长（少将）
1966（昭和41）年8月	「平和への戦い」（雑誌『文藝春秋』8月号，文藝春秋社）	岩畔豪雄	軍事課長，偽札工作（杉工作）の総責任者（少将）
1967（昭和42）年9月	「私は帝国陸軍で偽造紙幣を造った：日本最初の本格的な中国紙幣偽造秘話」（雑誌『現代』9月号，講談社）	高松繁	第三科中央班（当時の身分不明）
1975（昭和50）年1月	「日中戦争経済謀略」（機関誌『陸軍経理学校同窓会誌若松』新春号，若松会）	岡田芳政	松機関長，偽造法幣の流通責任者（大佐）
	「対支通貨謀略秘話」（機関誌『陸軍経理学校同窓会誌若松』新春号，若松会）	山本憲蔵	第三科科长（主計大佐）
1977（昭和52）年3月	「登戸研究所の秘密」（『陸戦兵器総覧』，日本兵器工業会）	篠田鎌伴繁雄	登戸研究所所長（中将）第二科第一班班長（技術少佐）
1977（昭和52）年3月	「風船爆弾による米本土攻撃」（『陸戦兵器総覧』，日本兵器工業会）	草場季喜	第一科科长（少将）
1980（昭和55）年10月	「秘密兵器を作った登戸研究所」（雑誌『歴史と人物』10月号，中央公論社）	伴繁雄	第二科第一班班長（技術少佐）

(2) 「登研会」が発足するまで

登戸研究所には研究所があった現・川崎市多摩区および周辺に居住する10代の若者が雇員・工具として多く雇用されていた。第2図が示すように，終戦直後の1946年の正月には，地域の元若手勤務員を中心に集まる機会があったことがわかる。こういった地域のつながりが基となり，1962（昭和37）年に第四科OBが中心となって第一回「登研第四科会」が開催される。これは元軍人を中心に結成された他の軍関係のOB会とは性質を異にし，地域の元若手勤務員が中心となって結成されたという特徴がみられる。



第2図 1946（昭和21）年正月に集まった元第三科北方班員 1946（昭和23）年1月撮影。

第四科は第二科と業務上密接なつながりがあったため，1963年には第二科と第四科合同で名簿が作成された。この第二科・第四科

会がのちの「登研会」の母体となる。

第三科については、1950年頃に元第三科員が「自然発生的に」集まり名簿の作成も行って<sup>(5)</sup>ようだが、米国の秘密戦に関わっていた「GPSO（政府印刷補給所）」員の大多数は三科会に出席することはなかった。



第3図 第一回登研四科会  
1962（昭和37）年7月撮影。

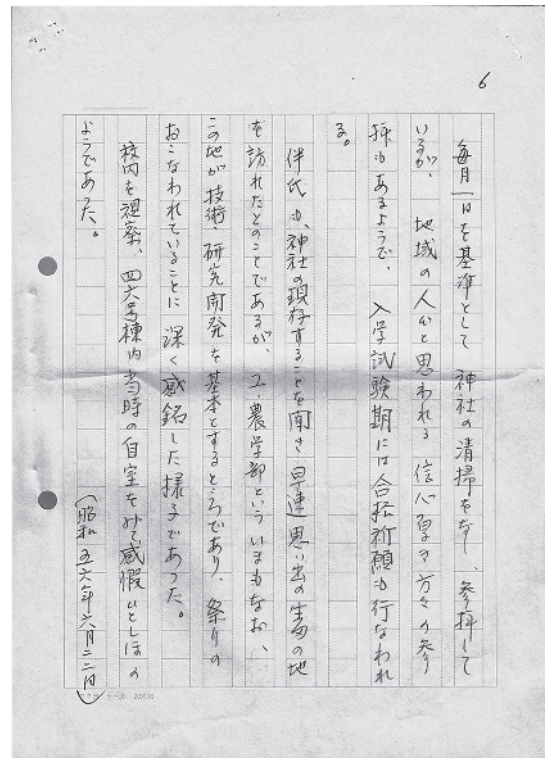
第2表 登研会が発足するまでのあゆみ

1946（昭和21）年	地域の元若手勤務員ら、正月に集まる
1950（昭和25）年頃	三科会が自然発生的に結成される
1961（昭和36）年	米国の秘密戦に携わっていた「GPSO」関係者、名簿作成
1962（昭和37）年	第一回登研四科会
1963（昭和38）年	第二科と第四科OBの名簿作成
1982（昭和57）年	登研会発足

(3) 第二科および第三科の活動が公けになる

生物化学兵器、毒物謀略兵器開発の中心だった第二科の活動については、帝銀事件に関連したためジャーナリストによって紹介されることはあったが、第1表からもわかるように、元所員自らが語ることは長らくなかった。しかし、一つの転機が訪れる。

1980（昭和55）年10月、伴繁雄（第二科第一班長、技術少佐）が実名を出して、雑誌『歴史と人物』10月号（中央公論社）に第二科の活動を発表する。この記事を通じて登戸研究所に関心をもったNHKが、登戸研究所の取材を始める。この取材過程でNHKスタッフは伴に生田キャンパス内に登戸研究所の遺構がまだ残っていることを知らせる<sup>(6)</sup>。これを受け、伴は1981年6月、登戸研究所跡地である明治大学生田キャンパスを戦後初めて訪れた。その際に当時の明治大学生田校舎事務部長が残したメモが「生田神社の由来」（第4図）である。メモには伴と篠田鎌が中心となっ



第4図 生田神社の由来 1981（昭和56）年6月、明治大学生田校舎事務部長作成。（明治大学所蔵）

て建立した「弥心神社（現・生田神社）」が今も残り活用されていること、さらに伴が使っていた研究棟（44号棟）の自室も残っており、今も農学部 of 学生たちが研究棟として使用していることをみて「感慨ひとしほのようであった」と書かれている。

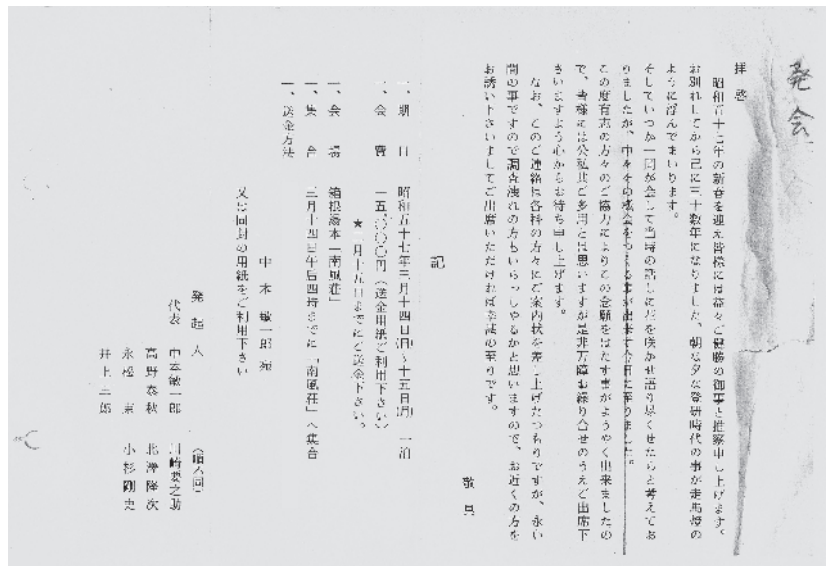


第5図 NHK「歴史への招待」取材で生田キャンパスを訪れた山本憲蔵 旧偽札印刷工場前で撮影された。1981（昭和56）年10月撮影。（狛江市所蔵）

また、同年10月には、これまで公けに一切偽造紙幣製造について語らなかった第三科長（大佐）の山本憲蔵が、責任者として初めてNHKの番組「歴史への招待」に出演し、その全貌を語る。番組では、山本は登戸に隣接する狛江市内に居住しながらも、戦後一度も登戸研究所跡地を訪れたことはなく、30年以上ぶりに足を踏み入れることについて「一回来たい来たいと思いつつ、もうチャンスはないと思っていた。感無量」と話す姿が印象深い。「極秘」とされていた第三科の活動を、責任者自らが公けに語る姿は、元所員らの心情に大きく影響したと考えられる。

(4) 「登研会」の発足と「登戸研究所跡碑」建立へ

戦後も登戸に居住していた第一科庶務班長（大尉）中本敏一郎、地元の元若手勤務員が呼びかけ人となり、1982（昭和57）年に初めて全ての科の元勤務員が集まる「登研会」が発足した。



第6図 第1回登研会案内状 1982（昭和57）年、登研会作成。（栗山武雄氏寄贈）

1982年3月に開催された第一回登研会では、交流を促進させるための名簿作成と「登戸研究所跡碑建立」が目指された。

1988年3月23日付「〔登研会〕会報」には、「登戸研究所跡地へ記念碑建立の件」として「登戸研究所跡地は、現在明治大学生田校舎が建ち並び、あの登戸研究所の面影がまさに消え去らんとしております。この敷地の一隅に、大学の許可を得て石碑を建立し、「陸軍登戸研究所」名を遺留したいことと存じます」とあるが、跡碑

建立には伴の生田キャンパス来訪が影響したと考えられる。

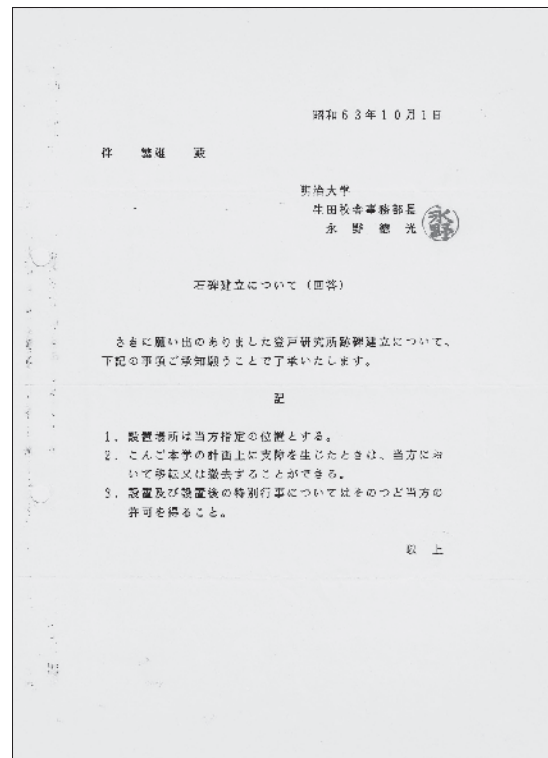
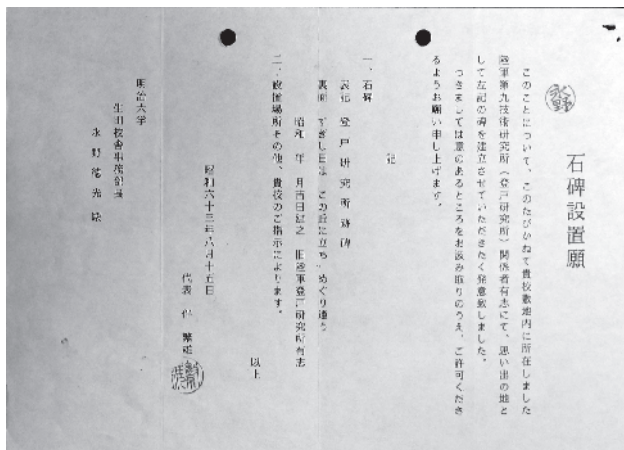
第一回登研会後に建立のための寄付が呼びかけられ、当時の身分や男女関係なく 85 名の元所員、勤務者より寄付金がよせられ、1988 年 11 月までに 54 万 5 百円が集まった。建立に際しての明治大学との交渉は伴が担い、弥心神社（現・生田神社）境内に跡碑を建立することが決定した。



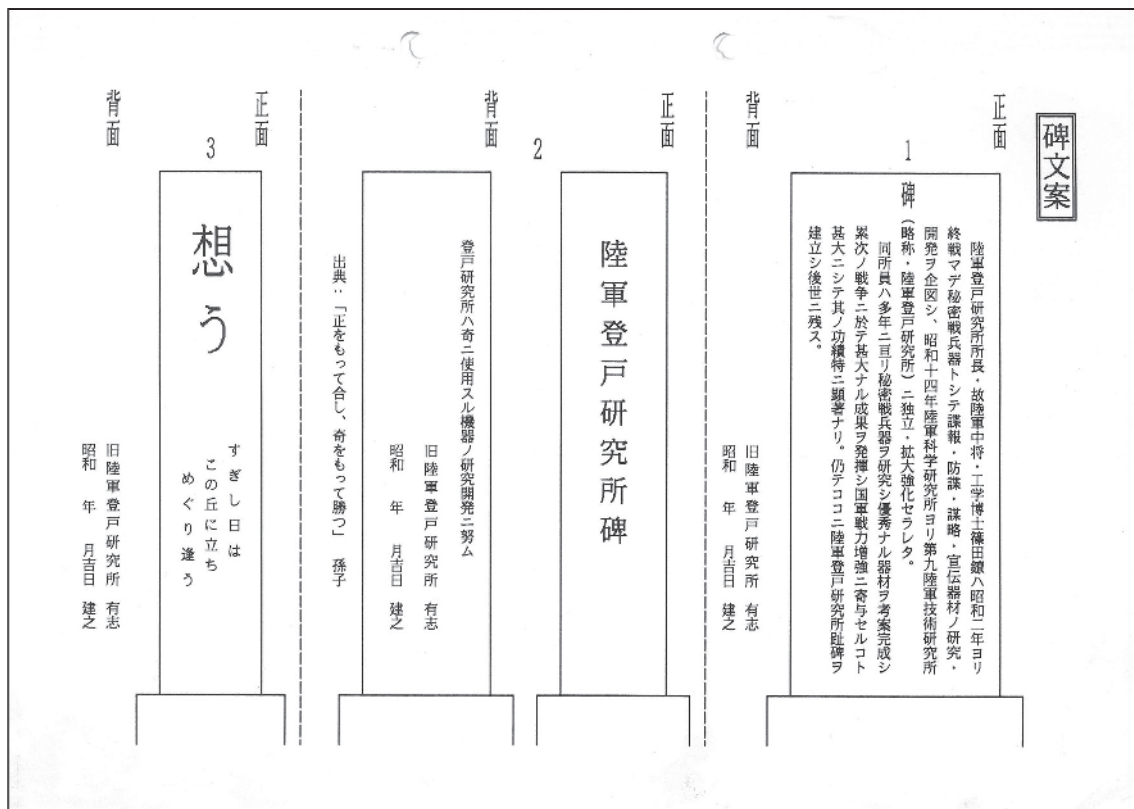
第7図 登研会のようす 2003（平成15）年9月撮影。

碑文については、登戸研究所の功績を遺す①案と②案、そして積年の思いを句にこめた③案が提案された（第9図）。碑文の選定は、将校クラス（幹部）の一存ではなく全員の意見が反映されるよう、投票制とされた<sup>(7)</sup>。1988年に行われた投票結果は第10図のとおりである。②案と③案が同票だったため、この2つを組み合わせた現在の碑文が決定した（第11図）。

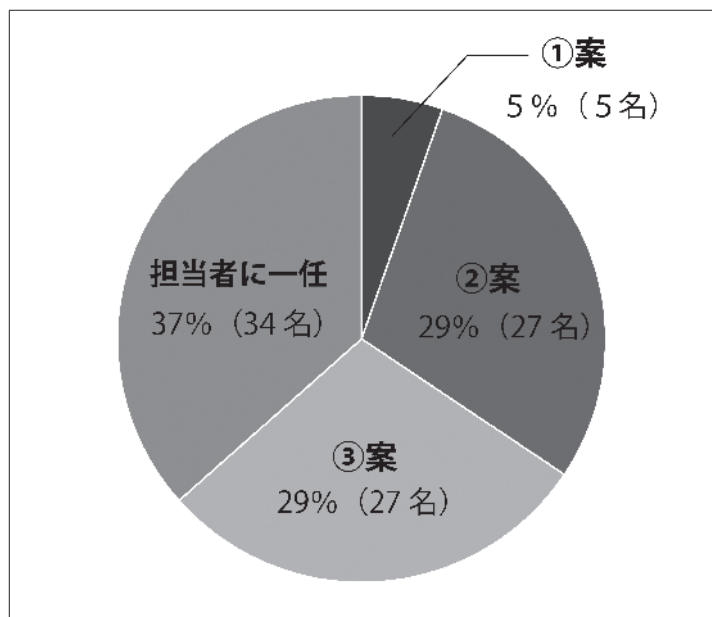
当時の身分に関係なく碑文が選ばれたことは、登研会の特色と言える。このような民主的な運営は他の旧日本軍関係のOB会ではみられないのではないだろうか。跡碑に刻まれた「過ぎし日は この丘に立ち めぐり逢う」という句<sup>(8)</sup>には「秘密を抱え込んだ人生から解放される喜び」が込められているという<sup>(9)</sup>。



第8図 「石碑設置願」(左) 1988（昭和63）年8月15日、伴繁雄作成。（明治大学所蔵）  
「石碑建立について（回答）」(右) 1988（昭和63）年10月1日、明治大学生田校舎事務部長作成。（渡辺賢二氏所蔵）

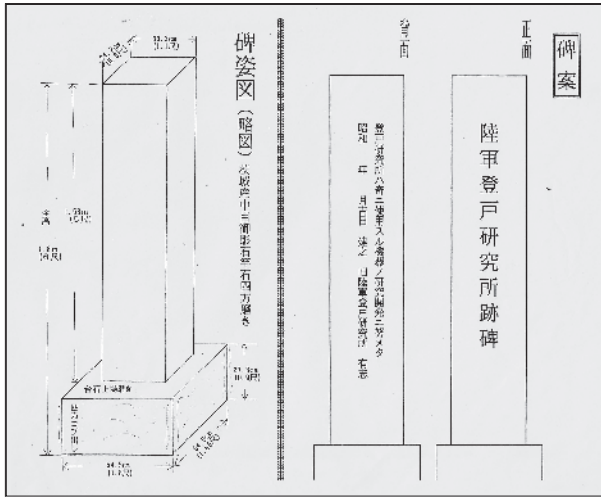


第9図 「碑文案」 1988（昭和63）年，登研会作成。（渡辺賢二氏所蔵）



第10図 碑文選考投票結果

100名にハガキが送付され、88名の回答があった（複数回答あり）。回答無の27名は一任に含めた。（渡辺賢二氏所蔵「登研会ファイル」より筆者作成）



第11図 「碑案」 1988（昭和63）年，登研会作成。（明治大学所蔵）



第12図 現在の跡碑 2020（令和2）年筆者撮影。

### (5) 跡碑建立時期について

跡碑の裏面をみると「昭和六十三年十月建之」となっているが，実際に建てられたのは1989（平成元）年4月だった。当時の登研会会長だった北澤隆次（元第四科技師）が跡碑揮毫者に宛てた書簡によると，昭和天皇の危篤が1988年9月に報道されたことにより，明治大学内の学生運動が活発化し事態が落ち着くまで建立を見送ったようである<sup>(10)</sup>。天皇崩御後も学生運動を刺激することを避け，大学の春休み期間中である1989年4月4日に据え付けが完了した。また，同年の11月22日には除幕式が執り行われた（第13図）。



第13図 跡碑除幕式 除幕しているのは伴繁雄。1989（平成元）年11月撮影。

## 2. 「登戸研究所」掘り起こし運動

### (1) 川崎市民による「登戸研究所」掘り起こし運動

川崎市民による登戸研究所記録活動として最も早い例は，郷土史家の角田益信<sup>かくた</sup>氏の写真記録である。角田氏は1982（昭和57）年より，生田キャンパス内外に残る登戸研究所遺構の写真記録を続けている。市民グループが登戸研究所跡地（現・生田キャンパス）を見学した最も早い例は，嶋村龍蔵氏が呼び掛けた1987年8月の川崎文化会議の見学会であろう。川崎文化会議のメンバーであり川崎市史編纂委員でもあった嶋村龍蔵氏は，市史編纂事業の過程で登戸研

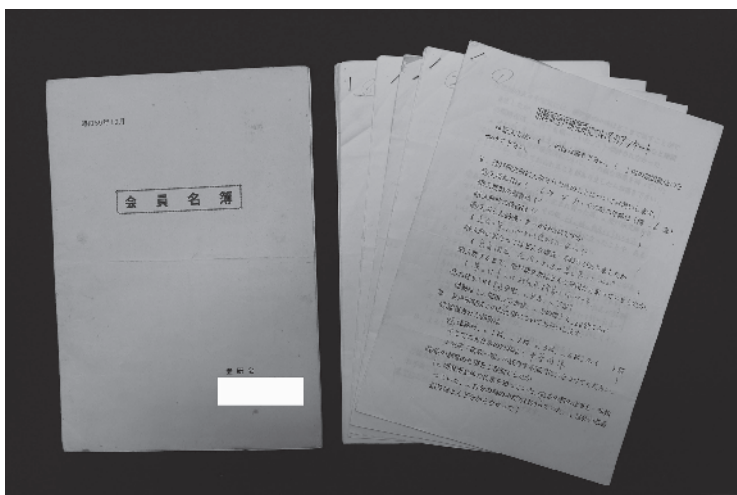


究所を知り、伴繁雄や山本憲蔵も取材し『わが街川崎』第3号（川崎文化会議, 1987年）に「陸軍登戸研究所 秘密謀略戦の研究基地」を発表している。そして、後の高校生や元勤務員らの掘り起こし運動にも大きな影響を与えたのが1987年度より始まる「中原平和教育学級」の取り組みである。川崎市は全国の政令指定都市にさきがけ「核兵器廃絶平和都市宣言」を出し、1985年には、行政が主導し市民自身が企画委員となって講座を運営する取り組み「平和教育学級」がスタートする。平和教育学級では市民の「地域の戦争の記憶を知りたい」という思いから、川崎市内各地で歴史の掘り起こし運動が展開された。その中で、前項で紹介した1981年放映の「歴史への招待」を見た中原平和教育学級メンバーが、地域にこのような歴史があったことに衝撃を受け、1987年度の学習テーマに登戸研究所を選んだのである<sup>(11)</sup>。

1988年2月には、中原平和教育学級主催で登戸研究所跡地見学会を開催した。多くの市民が集まる中、中原平和教育学級メンバー（以降、平和教育学級）は、元登戸研究所勤務員である井上三郎に出会う。井上から、「登研会」という登戸研究所OBが集まる会があることを告げられた平和教育学級は、彼らへの聞き取り調査を申し出たが、この時は断られた。しかし、井上自身はその後も平和教育学級の聞き取り調査に応じ、井上と交流のある元登戸研究所勤務員を紹介した。平和教育学級は元勤務員と交流を重ねる中で、井上より「登研会名簿」を託される。名簿を確認すると、多摩区や麻生区など川崎市内にまだ多くの元登戸研究所勤務員が居住していることが判明した。そのため、平和教育学級に所属していた高校生メンバーの一人から、名簿を基にした川崎



第14図 中原平和教育学級で元勤務員と調査する市民  
1988（昭和53）年7月撮影。（個人蔵）



第15図 登研会名簿とアンケート

市内在住の元勤務員へのアンケートが提案され、川崎市教育委員会の協力の下アンケートが実施された（第15図）。その中で、当時の文書約900点が綴られた第一級資料『雑書綴』が提供されることとなった<sup>(12)</sup>。

## (2) 長野と川崎の高校生による「登戸研究所」掘り起こし運動

平和教育学級のメンバーの一人であった渡辺賢二は、法政大学第二中学・高等学校（川崎市中原区）の教諭でもあった。1989（平成元）年、文化祭のテーマを生物化学兵器と決めた同校の高校生に、渡辺は登戸研究所のことを話した。「埋もれた過去の歴史を発掘するだけでなく、それを研究することで、現代につながるものが見えてくるのではないか」と考えた高校生は、平和教育学級の市民と共に登戸研究所の掘り起こしをしていくこととなる<sup>(13)</sup>。



第16図 文化祭で発表する長野県赤穂高等学校生徒  
1989（平成元）年平和ゼミナール撮影。

同じく1989年、登戸研究所の疎開先であった長野県駒ヶ根市でも、長野県赤穂高等学校「平和ゼミナール」が文化祭の発表テーマを登戸研究所に決める。きっかけは平和ゼミナールのメンバーだった春日いづみさんが「地元の戦争の傷跡を知ってもらいたい」との思いからだった<sup>(14)</sup>。

平和ゼミナールの高校生たちは、駒ヶ根周辺に住んでいる元所員らを尋ね歩き、当初は話そうとしなかった元所員と人間関係を築いていく中で、登戸研究所の活動を明らかにしていく。それまで大人には会おうとしなかった伴繁雄も、高校生たちが自らの手で登戸研究所の活動を明らかにしたことを「よく調べた」と評価し<sup>(15)</sup>、自らの経験を彼らに語るようになる。



第17図 高校生の聞き取りに応じる伴繁雄  
1989（平成元）年平和ゼミナール撮影。

二つの地域で始まった高校生による掘り起こし運動は同年10月には交流が行われ、1991年には、両校の活動をまとめた『高校生が追う陸軍登戸研究所』（教育史料出版会）が刊行された。

### (3) 元登戸研究所勤務者自身による「登戸研究所」掘り起こし運動

当初は親睦と跡碑建立を目的として開催されていた「登研会」だが、市民や高校生と関わる中で、自分自身が勤めた登戸研究所とはいったいどのようなところだったのか、自分たち自身で掘り起こそうという動きが地元の元若手勤務員を中心に広がる。

その中の一人、前述の井上三郎は『読売新聞』に次のように語っている。

「ずっとあの〔風船爆弾に〕細菌搭載のうわさが気になっていた。真相が知りたかった。

細菌搭載の計画はあったのか、中止した理由はなんなのか。

上司たちは何も語らないまま次々と死んでいく。登研会を作ったのには、旧交を温めるとともに、事実を後世にしっかり伝えるため、今みんなから聞いておかねばとの思いがあった<sup>(16)</sup>」

1995（平成7）年8月26日付『読売新聞』より。〔 〕内は著者補足。

元若手勤務員は自分が行った作業が一体何に使われたのか、作った器材がどこへ送られたのか一切知らされず、ひたすら仕事に打ち込んでいた。「極秘」とされていた登戸研究所の業務について、戦前はもちろん戦後も誰かに問うことや話すことは憚られた。井上の証言からは長年抱えてきた登戸研究所への複雑な思いが感じ取れる。

元勤務員自身により登戸研究所の掘り起こしが行われる中、伴は『中野校友会誌』（陸軍中野学校卒業生らの機関誌）より抜粋し、登戸研究所の活動の概要をまとめた『陸軍登戸研究所の思い出』を登研会で配布する。これは、当時は何もわからなかった若手勤務員たちに登戸研究所の全容を伝えるきっかけとなった。また伴は、登戸研究所の全容を後世に伝えるため、1988年より手記を執筆する。自身がわからない活動については登研会メンバーに原稿を募り『陸軍登戸研究所の真実』の原稿が1993（平成5）年に完成する。このような流れの中で、元勤務員も自身の体験を語るようになっていく<sup>(17)</sup>。

## 3. 掘り起こし運動から保存運動へ

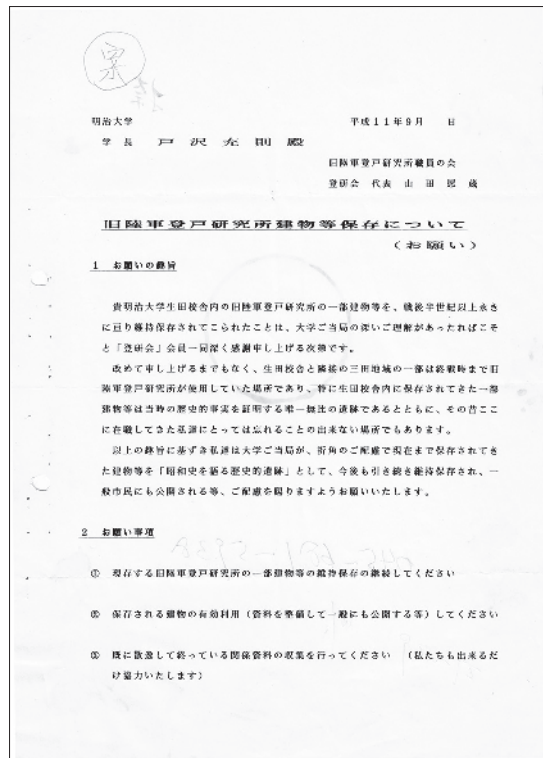
中原平和教育学級や高校生の掘り起こし運動によって、登戸研究所は多くのメディアでとりあげられ、市民の間にも関心が広がっていった。

1990（平成2）年、生田キャンパス内に残る旧登戸研究所本館の取り壊しが決定されたことから、登戸研究所遺構を保存しようという声が市民の中からあがり、同年に「旧陸軍登戸研究

所の建物を保存する市民の会」が発足、署名運動が展開され、12月14日に登戸研究所遺構の保存を求める署名3,339名が川崎市議会に提出された。この請願を受け、1991年、川崎市は旧登戸研究所本館の内外をビデオで撮影し、川崎市平和館に記録保存することを決定した。また、1991年6月には、川崎市平和館への移築保存を求める請願書も提出された。

また、文化財保護基準の改正（1995年）を受け、1998年より実施される文化庁の「近代遺跡調査」において保存運動の盛り上がりもあり、登戸研究所遺構が調査対象となった。さらに、2002年には国の文化財指定を念頭に入れた文化庁の全国戦争遺跡調査リストに登戸研究所が入り、文化庁による詳細調査も行われた。

また、登戸研究所の掘り起こしを自分たち自身ではじめた登研会でも、明治大学内に残る登戸研究所遺構の保存と活用を望む声があがるようになる。1999年9月に登研会は、当時の戸沢充則明治大学学長宛「旧陸軍登戸研究所建物等保存について（お願い）」を用意する（第18図）。この請願書では現存する登戸研究所遺構の維持保存、保存する建物は資料を整備し一般にも公開する等活用すること、既に散逸している関係資料の収集を訴えている。特に関係資料の収集については「私たちも出来るだけ協力いたします」とあり、これまで極秘とされてきた登戸研究所の活動について元勤務員自ら語り、資料も提供するという覚悟がみられる。しかしこの請願書は、学長が2000年に代わったため提出は見送られた。その理由の詳細は次章に記す。



第18図 戸沢学長宛「旧陸軍登戸研究所建物等保存について（お願い）」1999（平成11年）9月、登研会会長山田愿蔵作成。登研会が戸沢学長に提出する予定だったもの。（渡辺賢二所蔵）

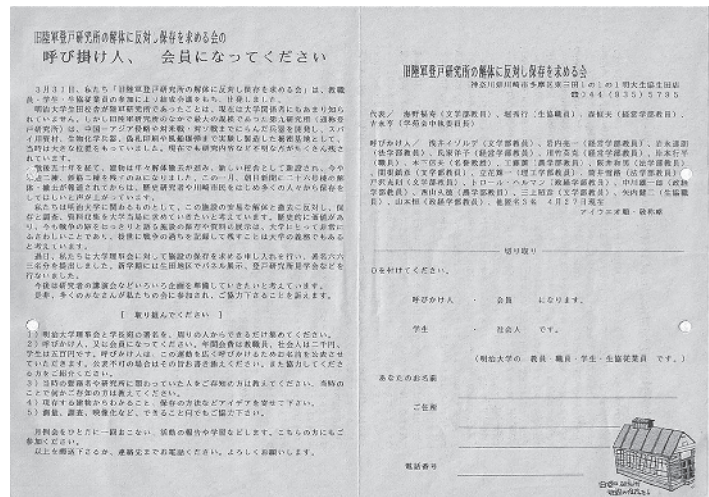
#### 4. 明治大学平和教育登戸研究所資料館設立へ

##### (1) 明治大学内での保存運動と学術的研究のはじまり

1994（平成6）年、明治大学は年度内の26号棟（第三科の倉庫）取り壊しを決定した。それを知った明治大学在学学生、教職員らが「旧陸軍登戸研究所の解体に反対し保存を求める会」（以降、「保存を求める会」）を同年3月に結成、学内での保存運動を展開することとなる。これま

で川崎市に対する移築保存を求める運動が市民によって続けられてきたが、「保存を求める会」の運動は明治大学に保存を訴える初めての保存運動だった。

校内での保存運動が展開される中で、学術研究として登戸研究所を検証する重要性を感じた海野福寿（当時明治大学文学部教授、保存を求める会共同代表）、森恒夫（当時経営学部教授、保存を求める会共同代表）ら明治大学教員と渡辺賢二は、明治大学人文科学研究所の総合研究として登戸研究所を取り上げることを決め、1994年に採択され、1995年度から3年度間、初めて組織的な学術調査が行われることとなった。また、この研究採択を受け、明治大学としてもすでに決定していた26号棟など旧登戸研究所遺構の取り壊しを調査研究のため3年間凍結することを表明した。この調査研究の成果は第3表に記す。



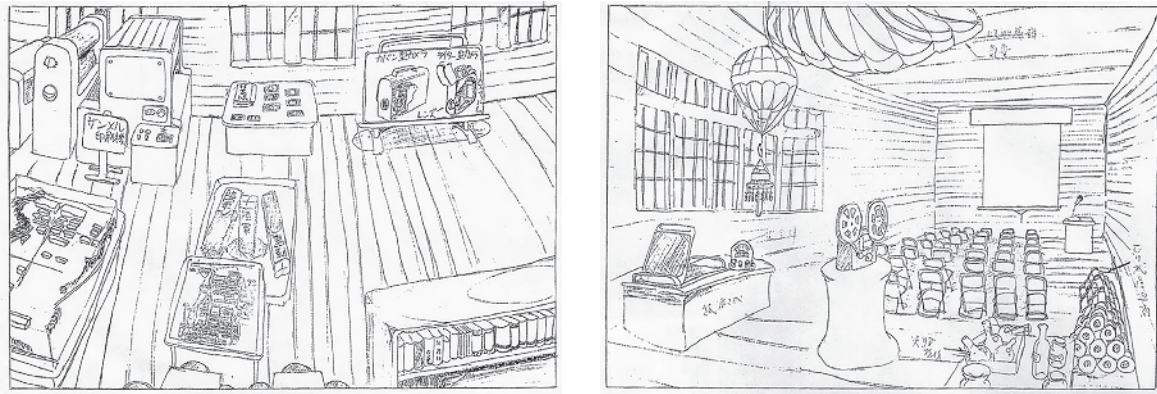
第19図 「旧陸軍登戸研究所の解体に反対し保存を求める会」チラシ 1994(平成6年)旧陸軍登戸研究所の解体に反対し保存を求める会作成。結成声明、呼びかけ人募集、講演会のチラシ。駿河台, 和泉, 生田各キャンパスで配布された。(明治大学所蔵)

第3表 人文科学研究所総合研究「旧陸軍登戸研究所の総合的研究—十五年戦争におけるその意義」の主な研究成果

写真家・吉田一法氏に依頼し、生田キャンパス、疎開先である長野県・福井県・兵庫県、人体実験を行った南京病院、阪田機関本部（上海）を取材およびスライド記録を作成。
元所員の証言を基に第三科疎開先である福井県武生および栗田部を調査。登戸研究所「北陸分廠」として接収した加藤製紙・西野製紙を調査し、疎開先での第三科の活動を明らかにした。
疎開先である兵庫県小川村を調査。「関西分廠」の活動を明らかにした。
元所員の証言を基に、終戦直後登戸研究所から寄贈された「登戸研究所」蔵書印がある書籍約1,000冊を静岡大学にて発見。
『雑書綴』復刻。(第三展示室に展示中)
研究成果をまとめた『陸軍登戸研究所』（青木書店、2003年）刊行。

(2) 登戸研究所跡地の保存・活用の兆しと凍結

人文科学研究所の研究成果により、登戸研究所が歴史的に重要であると学術的に示されたこともあり、当時の戸沢充則学長（文学部教授）は、登戸研究所跡地を大学として保存し活用すると表明する。これに基づき、1999（平成11）年4月には、学長の下に「登戸研究所跡地の保存及び活用に関する検討委員会」が発足する。この中で5号棟（偽造法幣印刷工場）・36号棟（生物化学兵器研究棟、現・資料館建物）を展示資料館と平和教育の場として活用することが模索され（第20図）、明治大学創立120周年にあたる2001年に展示施設およびモニユメントを設立することが決定された。



第 20 図 「登戸研究所資料館」展示イメージ図

1999年に発足した「登戸研究所跡地の保存及び活用に関する検討委員会」で出された5号棟および36号棟を活用した展示案。1999（平成11）年9月，森恒夫作成。（明治大学所蔵）

しかし、学内では学生運動が激化し、明治大学は正常な大学運営ができない状態に陥っていた。これを問題視した大学は「明治大学完全正常化」に全力を挙げることを表明する。登戸研究所保存運動を行う一部が学生運動に関係していたことから、2000年、新たに就任した山田雄一学長（経営学部教授）により、登戸研究所に関するすべての保存と活用方法が凍結されることとなった。



第 21 図 ミニ展示室の案内 2000（平成12）年撮影。（明治大学所蔵）

登研会では上記検討委員会の発足を

うけ、戸沢学長に提出すべく前述の保存と活用の請願書を用意していたが、大学の保存方針が変わったことから提出することは叶わなかった。

大学内で登戸研究所遺構の保存と活用が凍結されている間にも「保存を求める会」は、5号棟の一部に「登戸研究所ミニ展示室」を独自に設置（第21図）、元勤務員を講師に迎えた講演会を開催するなど保存・活用の運動を続けたが、大学として正式な取り組みが成されることはなかった。

### (3) 明治大学平和教育登戸研究所資料館設立へ

2004（平成16）年、新たに就任した納谷廣美学長（法学部教授）により明治大学における平和教育の柱として、登戸研究所遺構の保存と展示活用が打ち出され、4年間凍結されていた保存と活用問題がようやく動き出すこととなる。2005年春、大学は和田一夫（元登戸研究所

所員、登研会事務局長)、長年登戸研究所研究に第一線でかかわってきた渡辺賢二、元明治大学教員である海野福寿・森恒夫と登戸研究所遺構の保存と活用についての話し合いの場を設ける。その中で登研会を代表して和田より以下の訴えが出される。

「登研会より保存要求の嘆願書を預かっているが、登研会会長の山田愿蔵さんはもう90歳であるし、会員も歳をとり残り少なくなっているのです、早く処置をしないと貴重な資料が散逸してしまうと危惧している」

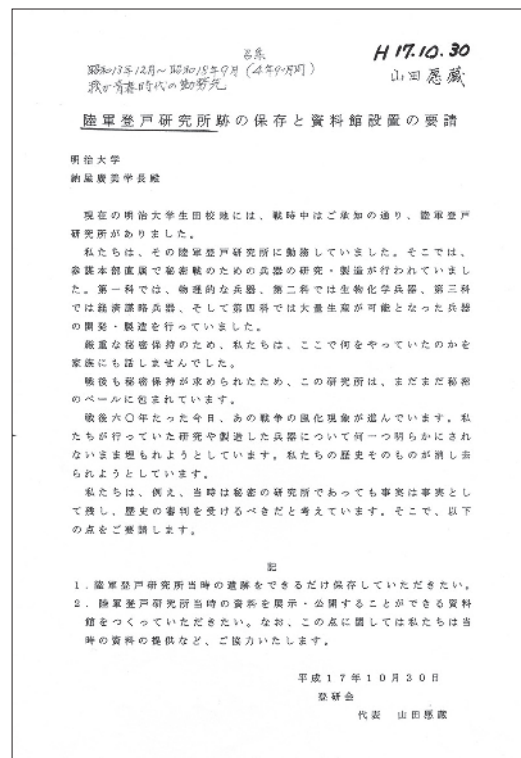
(明治大学所蔵「懇親会メモ」より)

この懇親会の内容は、同年10月に開催された登研会でも共有された。その中で、登戸研究所で行われた非人道的な研究や実験を繰り返してはいけない、後世の人たちには自分たちと同じ思いをして欲しくないという元勤務員たちの強い訴えが再度確認され、納谷学長宛に「旧陸軍登戸研究所建物等保存について(お願い)」(第22図)を提出した。

これを受けた大学は、2006年7月に「登戸研究所明治大学展示資料館(仮称)の設置に関する検討委員会要綱」を制定、同年9月に第一回検討委員会が開催され、具体的に登戸研究所遺構の保存と展示施設設立に動き出した。

また、中原平和教育学級から継続して、川崎市では何度も登戸研究所の学習が取り上げられ、市民の登戸研究所掘り起こし運動が市域に広がっていく。そうした中で、受講生らによって2006年に「旧陸軍登戸研究所の保存を求める川崎市民の会(現・登戸研究所保存の会)」が結成され、2007年1月には5号棟の移築保存と資料館設立に対し川崎市も明治大学を援助するよう署名活動を開始し、集まった9803筆とともに市議会へ請願書を提出する。この請願書を受け、26号棟解体(2008年)、5号棟解体(2011年)どちらの際にも調査を行い、部材の一部を保存し当館に展示している。

こうして多くの人々の思いを受け、2010年3月29日に明治大学平和教育登戸研究所資料館は開館した。



第22図 納谷学長宛「旧陸軍登戸研究所建物等保存について(お願い)」2005(平成17)年10月30日、登研会会長山田愿蔵作成。

## おわりに

残念ながら登研会会長の山田愿蔵さんは当館開館前に逝去され、開館を見届けていただくことは叶わなかった。しかし、オープニングセレモニー当日には多くの登研会メンバーの皆様にご参加いただき、当館は無事に開館することができた。その後も、当館の開館を知った元勤務員の方が多く来館されている。自ら元勤務員だと語ってくださる方もいる一方、こちらからお声がけして元勤務員だとわかる方もいた。中には初めて登戸研究所のことを人に話すという方もいらっしやった。話そうと思ったきっかけは、これまで誰にも話してこなかった内容が、資料館に展示され公開されている、もう話しても良いのだという思いをもったからとのことだ。

また、30年前、登戸研究所の疎開先である長野県駒ヶ根市において掘り起こし運動を率いた高校生、北原いづみさんが2019年、若くしてご逝去された。北原さんが元所員と人間関係を結んだことによって、「大人の誰にも話したくないが、君たち高校生には話そう」と人体実験や毒物兵器の製造といった重い事実を元所員は語るようになった。近年では駒ヶ根市でも登戸研究所の掘り起こし運動が再開され、市民や高校生が「登戸研究所調査研究会」を2018年に発足し、北原さんも世話人として活躍されていた中でのことだった。心よりご冥福をお祈りいたします。

多くの市民、そして元登戸研究所勤務員の「二度と登戸研究所で行われたことを繰り返してはいけない」という強い思いを受け取り、当館では登戸研究所の調査研究を進めていくとともに、その成果を社会の平和教育・歴史教育・科学教育に活用していただけるよう、これからも邁進していく。

## 謝辞

本稿を執筆するにあたり、下記のみなさまにご協力いただきました。ここに記し、感謝の意を表します。(敬称略・五十音順)

稲田郷土史会／狛江市／帝銀事件再審弁護団／登戸研究所調査研究会／

登戸研究所保存の会／毎日新聞社

## 〔注〕

(1) 帝銀事件とは1948(昭和23)年1月26日に発生した集団毒殺銀行強盗事件。使用された毒物が登戸研究所で研



- 究開発された特殊毒物ではないかと疑われ、元登戸研究所員の多くが事情聴取を受けた。『捜査手記』は、捜査の主任刑事・甲斐文助が残した捜査会議メモ。詳細は『明治大学平和教育登戸研究所資料館 館報』第5号（明治大学平和教育登戸研究所資料館，2019年）を参照されたい。
- (2) 海烈号事件とは1949（昭和24）年8月17日に横浜港にて発生した密輸事件。阪田誠盛、元阪田機関員の板垣清、5・15事件にも参加した三上卓ら計6名が共謀し、中国（台湾）国営の招商局所屬船「海烈号」にてペニシリンなど薬剤品約5億円分を中国（台湾）から密輸しようとしていた。
  - (3) 1950年6月9日付『毎日新聞』朝刊2面記事より。
  - (4) 1951年12月24日付『毎日新聞』朝刊3面記事より。
  - (5) 1972年12月10日付第三科会会員名簿送付状より（資料No.1936-002）。
  - (6) 「生田神社の由来」（明治大学生田庶務課長作成，1981年）1枚目。
  - (7) 昭和63年4月20日付「登研会会報」によると、本来であれば第4回登研会において碑文を決定する予定だったが、当日協議する時間が足りず、後日ハガキによる投票制となった。選考会には伴繁雄（技術少佐）、杉田正三美（下士官）、永松東一（下士官）、北澤隆次（技師）の他、雇員・工員の元若手勤務員4名（うち女性は2名）と当時の身分不明者1名が参加した。選考会への参加は登研会会員全員へ呼びかけられており、当時の身分に関係なく碑文が決定されたことがこの点によってもわかる。
  - (8) この句を詠んだのは登研会事務局の杉田正三美（下士官）だと登研会世話人の一人でもあった横山サト子（雇員）は語っている（2011年1月19日資料館聞き取りより）。
  - (9) 渡辺賢二「陸軍登戸研究所の実相をみつめて」（歴史科学協議会編集『歴史評論』2014年8月号、校倉書房）p.45。
  - (10) 『北澤隆次追悼集』より（資料No.270）。
  - (11) Love & Peace K30 川崎市教育委員会、川崎市高津市民館『川崎市平和・人権学習30年の歩み—1985年～2014年の記録—』（Love & Peace K30 川崎市教育委員会、川崎市高津市民館，2017年）。
  - (12) 『雑書綴』については2018年度企画展「少女が残した登戸研究所の記録—陸軍登戸出張所開設80年—」および『明治大学平和教育登戸研究所資料館 館報』第6号（明治大学平和教育登戸研究所資料館，2020年）を参照されたい。
  - (13) 長野・赤穂高校平和ゼミナール、神奈川・法政二高平和研究会『高校生が追う陸軍登戸研究所』（教育史料出版会，1991年）p.143。
  - (14) 同上 p.13。
  - (15) 1989年8月赤穂高校平和ゼミナール撮影伴繁雄インタビュー映像より（木下健蔵氏提供）。
  - (16) 井上三郎は第四科に所属し、風船爆弾打ち上げを担当していた。
  - (17) 和田一夫（第一科工員）は1994年に自伝『昭和とともに生きて（わが人生の足跡）』を刊行、川崎要之助（第四科憲兵器材担当）は1997年～2001年にかけて多摩区で活動する稲田郷土史会機関誌『あゆたか』第35～39号に登戸研究所についての記録を発表した。

#### 〔参考文献〕（著者名五十音順）

- 稲田郷土史会『あゆたか』第35号～第39号（稲田郷土史会，1997～2001年）  
海野福寿、山田朗、渡辺賢二『陸軍登戸研究所 隠蔽された謀略秘密兵器開発』（青木書店，2003年）  
川崎市中原平和教育学級編『私の街から戦争が見えた 謀略秘密基地登戸研究所の謎を追う』（教育史料出版会，1989年）  
斎藤充功『謀略戦 —ドキュメント陸軍登戸研究所』（時事通信社，1987年）  
鈴木正敏「キャンパスの正常化」  
（明治大学経営学部人文科学研究室『人文科学論集』第58号，明治大学経営学部人文科学研究室，2012年）  
長野・赤穂高校平和ゼミナール、神奈川・法政二高平和研究会『高校生が追う陸軍登戸研究所』（教育史料出版会，1991年）  
登戸研究所調査研究会『北原いづみさん追悼集 いづみさんの思いを受け継いで』（登戸研究所調査研究会，2019年）  
濱田武士「戦争遺産の保存と平和空間の生産」（歴史科学協議会編『歴史評論』2014年8月号，校倉書房）  
村上有慶「戦跡保存の取り組みと課題」（歴史科学協議会編『歴史評論』2014年8月号，校倉書房）  
山田雄一「明治大学キャンパス秩序回復をめぐる」

(機動隊員等を励ます会『はげまし』第364号, 機動隊員等を励ます会, 2005年)

Love & Peace K30 川崎市教育委員会, 川崎市高津市民館『川崎市平和・人権学習30年の歩み—1985年～2014年の記録—』(Love & Peace K30 川崎市教育委員会, 川崎市高津市民館, 2017年)

渡辺賢二『陸軍登戸研究所と謀略戦—科学者たちの戦争』(吉川弘文館, 2012年)

渡辺賢二「陸軍登戸研究所の実相をみつめて」(歴史科学協議会編『歴史評論』2014年8月号, 校倉書房)

第11回企画展「極秘機関『陸軍登戸研究所』はこうして明らかになった—登戸研究所掘り起こし運動30年のあゆみ—」展示資料一覧

本稿図表番号	資料名	所蔵者	資料番号
掲載無	『週刊現代』1959年8月30日号(複製)	登戸研究所資料館	C-122
掲載無	帝銀事件『甲斐捜査手記』別巻より(複製)	帝銀事件再審弁護団	—
掲載無	『歴史と人物』1980年10月号(中央公論社)	登戸研究所資料館	1983
掲載無	『歴史への招待』(NHK)	渡辺賢二氏	—
第4図	「生田神社由来の一つ」(複製)	明治大学	—
第6図	第一回登研会案内状	登戸研究所資料館	971
掲載無	第一回登研会の報告および登研会名簿呼びかけハガキ	登戸研究所資料館	970
第8図	石碑設置願	明治大学	—
第8図	石碑建立について(回答)	渡辺賢二氏	—
第9図	碑文案	渡辺賢二氏	—
第11図	碑案	渡辺賢二氏	—
掲載無	「登研会会報」(登研会, 1988年4月20日)	渡辺賢二氏	—
掲載無	碑文アンケートハガキ(登研会, 1988年)	渡辺賢二氏	—
掲載無	跡碑に関する書簡(『故北澤隆次追憶集』より)	登戸研究所資料館	270
掲載無	「登研会会報」(登研会, 1989年5月25日)	渡辺賢二氏	—
掲載無	「登戸研究所跡碑」拓本(2013年稲田善樹氏作成)	登戸研究所資料館	—
第12図	現在の「登戸研究所跡碑」写真(2010年撮影)	登戸研究所資料館	—
掲載無	1987年度・1988年度中原平和教育学級募集チラシ	登戸研究所資料館	1950
第15図	登研会会員名簿	登戸研究所資料館	1948
第15図	元陸軍登戸研究所についてのアンケート(回答)	登戸研究所資料館	71
掲載無	1981年12月22日付『毎日新聞』切り抜き	登戸研究所資料館	1768
掲載無	『あゆたか』第35号(稲田郷土史会, 1997年)	登戸研究所資料館	—
掲載無	松川仁『キノコ随想』	登戸研究所資料館	154
掲載無	伴繁雄『陸軍登戸研究所の真実』原稿	登戸研究所資料館	152
掲載無	和田一夫『昭和と共に生きて(わが人生の足跡)』	登戸研究所資料館	597
掲載無	川崎市教育委員会「近代遺跡(軍事に関する遺跡)詳細調査の実施について(依頼)」(1998年)	明治大学	—
掲載無	文化庁「近代遺跡詳細調査(陸軍第九技術研究所 明治大学生田校舎所在)にかかる協力依頼の送付について」(2003年)	明治大学	—
第18図	「旧陸軍登戸研究所建物等保存について(お願い)」(登研会, 1999年)	渡辺賢二氏	—
第19図	「旧陸軍登戸研究所の解体に反対し保存を求める会」チラシ(1994年)	明治大学	—
掲載無	登戸研究所遺構保存要望書および署名(1999年)	明治大学	—

第20図	「登戸研究所資料館」展示候補資料リストと展示イメージ図（1999年）	明治大学	—
掲載無	『明治大学新聞』（明治大学新聞学会、2000年）	明治大学	—
第22図	「旧陸軍登戸研究所建物等保存について（お願い）」（登研会、2005年）	登戸研究所資料館	587
掲載無	大島康弘「旧陸軍登戸研究所資料館完成にあたって」（2010年）	明治大学	—



## 第11回企画展「極秘機関『陸軍登戸研究所』はこうして明らかになった」

### オンライン講演会①

## 「登戸研究所掘り起こし運動30年のあゆみ」

渡辺 賢二

資料館展示専門部会委員, 元法政大学第二中学・高等学校教諭

### はじめに

こんにちは。資料館展示部会専門委員をやっております, 渡辺賢二でございます。今日は「登戸研究所掘り起こし運動30年のあゆみ」と題して, お話をさせていただきたいと思います。本来であれば, 直接皆さんと顔を合わせてお話したいところですが, こういう事情で, ぜひ画像だけでということで, よろしくお願ひしたいと思います。

## 1. 登戸研究所の概要

### (1) 登戸研究所があった場所

登戸研究所がどこにあったのかというと, 現在の明治大学生田キャンパスがそれにあたります。向ヶ丘遊園と生田のちょうど間の丘の上に, 明治大学生田キャンパスがありますが, そこが陸軍の秘密戦のための兵器を開発する登戸研究所があった場所でした。この場所は何故選ばれたのかというと, 新宿に陸軍の科学研究所というのがありました。その一つの部局が, 電波兵器なんかを研究するのに都合の良い場所を探していました。そうしましたら, 丁度, 今の生田キャンパスの場所, これが良いということで選んだわけです。それは小田急線で, 新宿から今の向ヶ丘遊園, 当時は稲田登戸と言いました。そこに直接急行できて, そこから歩いて行ける。非常に良い場所だという事で選んだ場所でした。

現在の生田キャンパスは小田急線に沿って, 広大な理工学部・農学部があります。終戦直後の登戸研究所, これは向ヶ丘遊園と生田の間に, 100以上の建物があり, 敷地面積も合わせると11万坪という広大な研究所の敷地がありました。陸軍の技術研究所が10あったわけですが,

その中でも最大のものでした。

## (2) 明治大学構内に今も残る登戸研究所の遺跡

今も明治大学構内には、いろいろな遺跡が残っております。一つ象徴的なのは、動物慰霊碑です。これは、書いたのが篠田鐮という、ここの所長で、最後中将になる人です。それでこの動物慰霊碑の裏面には、「昭和十八年三月 陸軍登戸研究所建之」という事で、どんな動物を実験したんだろうか、という思いがここからひたひたと、私たちに呼びかけているように思います。この昭和 18 (1943) 年 3 月というのは、大変重要な年で、弥心神社と当時言っていて今は明治大学生田神社となっていますが、ここに登戸研究所跡碑を建てています。これが今日話す非常に重要なポイントになります。

この弥心神社というのは、発明の神を祀るという事で、これも昭和 18 年 3 月に建てられるわけですが、ここに通っている 1000 名くらいの人たちは誰一人知らない人がいない。ここに集まって、発明祈願とか戦勝祈願とか行った場所でした。この碑や神社が残っているのは、大変珍しいことだと思います。普通、大学といっても文系だったら、動物慰霊碑なんていうものはいらないわけです。神社ももちろんありません。しかしこれがなぜ残ったのかというと、1951 年に明治大学がここを購入して入ってきました。その学部が農学部だったということが幸いしました。農学部は実験をやりますので、動物慰霊碑が必要でした。ですから、これは良いという事で、ここで毎年動物慰霊祭をやるようになりました。それから神社も、これも農学部としては活用できるという事で、11 月には収穫感謝祭をこの場でやると。そんな形で保存されてきました。それが今、登戸研究所の軌跡を伝える、大変重要な遺跡として保存されるに至っている、その背景になっているわけです。そのほか、陸軍のマークがついた消火栓などもあります。

それから正門を入ると、すぐにヒマラヤスギがずーっと植えられています。その後ろは本部があった場所でした。このヒマラヤスギはいつ植えられたのかというと、日本高等拓植学校というブラジル移民の人達を指導する学校が建てられた時 (1932 年) に植えたものですから、もう 90 年ぐらい経ちます。ところがブラジル移民が減少し、廃校になりました。そこに登戸研究所が来て、それを本部として、さらに拡張して登戸研究所が整備されていきました。この中には、弾薬庫なんかもあります。

## (3) 戦後も残っていた登戸研究所の建物

登戸研究所は 100 棟以上ある建物から成り立っています。1947 年に米軍が空撮していますが、空襲の跡がありません。ここは得体も知れない事をやっているに違いないという事で、アメリカは空襲一つしませんでした。生田や登戸周辺は、攻撃するけれど、ここは保存しました。で

すから戦後すぐにここに調査に入ってくる背景はそこにありました。

戦後は、明治大学農学部が入りました。農学部というのは、長靴を履いて色んな研究をする、農業技術者を育てる学部でしたから、この兵舎みたいな建物をそのまま利用して、1980年代までこういう風貌で残ったわけです。それが私たちの、戦争遺跡として保存する運動を励ます材料にもなりました。そういういくつかの偶然が、登戸研究所を発掘し、今日に残していく一つの偶然がその背景にあったとっていいと思います。

これが1966年に明大の人が撮った旧本館、本部跡の写真です<sup>(1)</sup>。この中には、く号兵器（怪力光線、決戦兵器とも言われますが）、それを研究開発していた建物も写っています。木造ですが、中には柱一つない西洋トラスト構造という、鉄筋で梁を張りめぐらしている建物でした。ここで数十メートル先の動物を殺害できる光線を発明しました。そこには三笠宮も来て見学している歴史もありました。

#### (4) 極秘にされていた登戸研究所

この登戸研究所は多くの日本国民は知らなかったのです。日本国民だけではなくて軍部の人も知らなかったのです。知っていた人はごくごく一部です。参謀本部と関係部局、天皇並びに皇族、それから陸軍科学研究所の担当部局、そしてここで作った兵器を使う関係で、陸軍中野学校の関係者。そしてもちろん陸軍登戸研究所に勤務していた人、約1000人になります。囑託になった人も含めてです。その他、陸軍登戸研究所に関係した特務機関、憲兵の人は知っていたと思います。しかし、ごくごく一部のしか知らない世界でした。なぜ知られていなかったのか。それはここが秘密戦のための研究所だったからです。

#### (5) 登戸研究所で研究されていた秘密戦兵器・器材

秘密戦というのは、防諜・諜報、これはスパイ防止・スパイ活動です。それから謀略。何をやってもいいから勝つための兵器を発明する。それから宣伝。自国がいかにいいことやっているかという宣伝をします。これを秘密戦と言います。防諜・諜報器材としては、ここで無線機材、盗聴機材、秘密インク、秘密カメラ、変装機材、犬迷い剤なども作っています。犬迷い剤というのは何かというと、これはスパイをする人たちが一番恐れるのは、相手の国の大砲とかそういう物ではなかったんですね。軍用犬に吠えられる事なんです。ですから、スパイ活動する人たちから、軍用犬が吠えない薬を発明してくれという注文がいっぱい来しました。そこで登戸研究所では忍者を研究して、忍者が家に入る時にミミズを撒いたと。なぜ撒いたかということ、ミミズには犬を吠えさせないものがあるという事で撒いたらいいんです。その忍者の研究から、特殊なエキスをミミズから取って、それを薬品にして噴霧したり、撒いたりしながらスパイ活動をする薬を発明した。それを多く大陸に送っていく。これは大変重宝がられたともいいます。

秘密インキですが、これは白い本やノートにインキ、食塩・のり・アスピリン、その他、これを細い筆で書く。しかしそれはそのまま乾くと消えるわけです。それを受け取る側がヨードを塗ったり、あるいは紫外線を当てたりすると浮き上がってくる、こういうスパイの暗号機材として秘密インキが大量に作られたという事もあります。

謀略機材としては、要人殺害用の各種毒物、特に、すぐには死なない特殊な青酸ニトリルという、数分とか20分とか経ってから相手がバタバタ倒れる、その間にこちら側の撒いた要員は逃げる。そういう物とか、一瞬にして死ぬ蛇の毒、これを注射器で打って殺す物とか、火炎瓶、毒ガス、毒入りチョコ。それから細菌兵器では、中国で大量に撒いた小粒菌核病菌しょうりゅうきんかくびょうきんというものとか、あるいはこれは後で出ますが、アメリカに風船爆弾を投下します。その時ウイルス兵器をつける。特にアメリカ人は自分たちの生活上重要な牛、これが大量に死んだらこれはびっくりするだろうと。したがって牛疫ウイルスぎゅうえきというすぐに牛が死ぬようなウイルス兵器の研究もやりました。それからこれも後から出てきますが偽造紙幣。これは大量に作っています。こういう平時では考えられないような謀略の機材をここで作っていたという事になります。

それから宣伝機材としては、和紙をこんにゃく糊で貼った気球を作ってビラを付けて飛ばすとか、特殊の拡声器とかやっていますが、この宣伝機材は、最後は風船爆弾としてさらに発展することになりました。

登戸研究所は1943年4月に、軍功によって陸軍大臣東条英機から陸軍技術有功章を授与されます。これがその受章状です。篠田鐮の次が、伴繁雄という人が載っていますが、この人が青酸ニトリルなどで、中国で人体実験をして、兵器として活用した人です。その人が技術有功章をもらうわけです。ですから、内容は「特殊理化学資材を研究し優秀なる資材」となっていますが、何をやったかというのを書いていません。しかし、そういう謀略兵器を開発したことが章に繋がったことは確かです。この副賞が当時のお金で1万円、今のお金に直すと1000万円くらいもらえます。それで動物慰霊碑や神社を建てたというわけです。

#### (6) 軍の法規からも消されていた登戸研究所

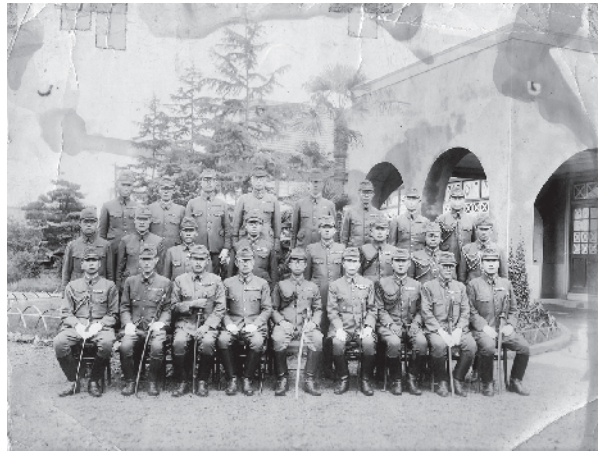
この研究所は、陸軍の法規の中でも特殊な扱いをされていました。陸軍の技術研究所というのは番号を振られます。第一条には第一技術研究所、第二条には第二技術研究所。ところが、この登戸研究所は九番目につくられたので第九技術研究所と呼ばれるはずでした。しかし、第九条にはなぜか第十技術研究所とされていました。したがって、第九技術研究所は軍の法規の中からも消されていたのです。そこで、陸軍登戸研究所としかいいようがなかったのです。なぜこの名前を使ったかという、向ヶ丘遊園という駅は、当時は稲田登戸といいました。新宿から急行で来て、そこから歩いて行くので登戸研究所としかいいようがなかった研究所でした。こうした例は、学校では陸軍中野学校、中野駅で降りるスパイたちを育てる学校、こういうも



のと連動して、陸軍の中では特殊な役割を果たしたことを意味します。

これは三笠宮が風船爆弾を打ち上げる直前、登戸研究所に視察に来た写真です（第1図）。いかに皇族なども含めてここを重視したかという事が分かります。

大本営・参謀本部は、この研究所に大いに期待していました。そのことを二つの例でお話します。



第1図 三笠宮視察時に撮影された写真  
1944（昭和19）年撮影（資料館所蔵）

### (7) 「秘密の中の秘密」であった偽造紙幣による作戦

一つは、「秘密の中の秘密」であった偽造紙幣による作戦を行ったという事です。現代戦は武力戦だけで勝利することはかなり難しいです。日本の傀儡政権をいかにつくるかという事が中国との戦いで重要でした。そこで、日本は柳条湖事件という事件を起こし、関東軍の謀略から始まって、満州事変と満州国建国によって、中国の東北部に一つの満州国という傀儡政権を打ち立てました。それが日中戦争でも同じことを行いました。それが傀儡南京政権、汪兆銘政権を樹立しようという事でした。その汪兆銘政権を樹立するという事は、なかなか難しい問題でした。

中国政府は蒋介石政権と言いますが、それは法幣制度を確立していました。1935年から作られたわけです。米英の支援で法幣の制度ができたわけです。紙幣の印刷工場も香港やラングーン（ともに当時はイギリス領）にありました。そのことが日本の軍部、特に秘密戦部隊にとってみれば弱点だとみました。そうした経済体制の弱点をつかんで本格的な経済戦をやっていくことで、偽造紙幣作戦をやって、汪兆銘政権の経済政策を助けようとしたわけです。

1942年、アジア太平洋戦争に入ってから、本格的な謀略作戦に入っていきます。それは香港などで中国の国民政府のお札を刷っていたわけですが、そこを襲ってですね、登戸研究所の勤務員が行って印刷機材を持ってきた。中国紙幣の原版、それから印刷機械、そういうものを持ってきて登戸で製造しました。ですから、ここからは本物で使えるものがここで作られた事になります。総額45億元製造して、35億元使用しています。これは当時の予算額を上回るものを作ったという事になります。したがってこれで軍需物資を買って、それから兵士の給料にも与えるわけですから、日本の財政を全然痛める事なく戦争をするという、ものすごく重要な役割を果たしていたわけです。したがって中国政府は、それに対抗する処置として、印刷機械も持っていかれたし、大変困るわけです。そこでお札の制度も崩壊してもいいという覚悟で、米英の支援で高額紙幣として1万元札とか、最後は100万元札まで作って偽札を淘汰する形で

応戦した。これがお札を作ったの戦いだっただのです。

偽造紙幣の印刷の工場は、10年前の東北大震災が起こる前まではありました。それがもう古くなったという事で、今は無くなりました。この建物も下はコンクリートを敷いて、その下に丸い石を敷いて、どんなに重い印刷機が入っても大丈夫なようなところで偽造紙幣を作っていたという事になります。

これが資料館に今も展示している六連の偽札です。なぜ偽札かというと、これはちゃんとして持っていけば本物として使えるわけですが、どうも色がおかしいという事で、登戸研究所での製造の過程で廃棄したものです。それがありますから、ここで作って使ったものはもう偽札か本物かは分からない。本物として使用したこともありますが、これは偽札に他ならないという事になります。

#### (8) 風船爆弾作戦

二つ目は、アメリカでの風船爆弾作戦です。アメリカ向けに「決戦兵器」として何かやりなさいという命令が出ました。そこで登戸研究所では、風船爆弾を開発したわけです。飛行機もダメ、潜水艦もダメ、そうしたら風船を上げてそれに兵器を積んで飛ばそうという作戦でした。したがって、その作戦を受けて、この登戸研究所には気象研究者や電気関係研究者、紙・糊などの科学研究者などが動員され、和紙をこんにゃく糊で貼って直径10メートルくらいの気球を作って、そして高度維持装置でアメリカまで届くものを開発しました。爆弾部分には、アメリカ人が食べられなくなったら大変困るというものは牛だろうという事で、牛疫ウイルスという、当時これにかかったら牛はころりと死ぬ、その兵器を開発して、強毒化して、零下40度でも生きるような形にして搭載する研究を登戸研究所で行って、2トンといわれる大量の生物化学兵器を貯蔵するまでに至りました。

しかし実際はそれを投下しませんでした。なぜかということ、やはり生物化学兵器を飛ばすというのは、国際法で禁じられていたわけです。したがってそれをやるんだったら大変だという事で、やるぞやるぞと見せかけて、実際は焼夷弾を搭載した謀略兵器として9300発打ち上げます。打ち上げる場所は、一宮、大津、そして勿来<sup>なご</sup>という3か所。そこから打ち上げます。そして1000発くらいがアメリカに届いたわけです。これにはアメリカはびっくりしますね。したがってアメリカとしてはそれを途中で撃ち落としたりするわけですが、大陸に1000発届いた。しかし、焼夷弾ですから、しかも冬ですから、落ちて雪の上という事が圧倒的に多かったために、効果はすごく少なかったといえると思います。

#### (9) 戦後も秘密にされた登戸研究所の実相

戦後の話ですが、冷戦下、アメリカは登戸研究所がやっているものが謀略作戦の兵器だと考

えて、731部隊と同じように戦後すぐに尋問に入ってきます。これはサンダースレポート、トンプソンレポート、フェルレポート、ヒルレポートにも見られます。登戸研究所や731部隊の関係者が尋問されましたが、しかし、なかなか本当のことを言いませんでした。最終的には「ギブアンドテイク」という約束で戦犯免責と引き換えに、登戸研究所も731部隊も、すべて米軍に資料を引き渡しました。そして、陸軍登戸研究所関係者はすべて公職に復帰します。しかし、それだけではだめだという事で、米軍は登戸研究所の人たちの一部を横須賀のキャンプ、そしてサンフランシスコなどにそのまま動員して要員として使い資料を収集して、朝鮮戦争やベトナム戦争にあたったという歴史も今では明らかになっています。

## 2. 市民・高校生が明らかに、明治大学がまとめた登戸研究所の実相

### (1) 市民・高校生による登戸研究所の掘り起こし

ここからが今日のお話の本題で、登戸研究所がどういうふうなかたちで明らかになってきたのかという歴史をお話したいと思います。戦後すぐに松本清張さんや斉藤充功さん、そういうジャーナリストなどが登戸研究所を注目して本をまとめたものがありました。しかし、その全体像はほとんど分からなかったわけです。それがどういうふうにして分かってきたのかというと、大変不思議な経過でした。

それは、市民や高校生の取り組みが決定的な意義があったという事です。一つ目は市民が動く時、大切なものが発掘されるんだという事をお話したいと思います。1986年から、川崎市では平和教育学級などが始まります。そして1987年から川崎市の中原区の川崎中原平和教育学級というところで、川崎の戦争中どうだったのかという事を調べる学級が呼びかけられます。川崎に住む人々、それから法政二高という私が勤務した高校生なども含めた学級で調べ始めました。しかし登戸研究所に来ても何の材料も集まりませんでした。誰一人話してくれる人もいませんでした。ある時一人の人が来ます。これも後でその写真も出ますが、井上さんという人でした。その井上さんという人から情報を得て、「誰か話す人いないんですか？」と聞くと、「いや誰も話さないよ。墓場まで持って行こうとして別れたから」と言うのです。

しかし、ちょうど今から37年前に登戸研究所に勤めた人たちの登研会をつくらうという事で、名簿を作っている、その名簿の中から川崎に住む人たちの名前を提供受けて、その名簿にアンケートを送ったんです。そうしたら、15歳でここに勤めたという一人の少女が史料を持っていますというのです。不思議なことに防衛庁（現防衛省）に行っても史料がない、国会図書館に行ってももちろんない、何の史料もない登戸研究所について史料があると。まあ大したもの

じゃないだろうと、15歳ですからね。それで行きましたら『雑書綴』という史料を提供してくれたのです。雑書ですから「雑書」だと思いいなる方も多いかと思いますが、これが決定的なものでした。

これは九百何枚も綴っています。しかも、陸軍登戸研究所とちゃんと書いてある。そしてどういう事を行ったのかという事をちゃんと書いてある和文タイプの綴りだったのです。「こうしたものを何で持ってたんですか」と聞くと、「いや、私は重要なものだとは全く知らなかったんです」というふうに小林コトさんという人は語ってくれました。和文タイプというのはなかなか難しかった。だから、最初は全然やる気もしなかったしできなかった。ところが登戸研究所の第二科で「あなたは優秀だし生真面目だからできるだろう」ということで、渋谷のタイプの学校に通い続けるわけです。そして練習し続けて和文タイピストとして第二科の仕事を受けた。したがってそのうちの極秘という判の無いものの、一つの複製だけは綴じることを許されたと。そういう偶然があったんですね。それを毎日毎日1枚ずつは綴じ続けて、そして九百何枚の綴りになったというわけです。大変な努力の上で作ったのがこの『雑書綴』だと。「しかし、そういうものを綴ることをどうして許されたんですか」と聞いたら、「それは自分の技術が上達していることを確かめるために一日1枚だけは許されたんです」と語ってくれました。そして「それが戦後どうして自分の手元にあるんですか」と聞いたら、「実はこれは重要だから廃棄しなければいけないと敗戦の時に思ったけれども、しかし自分にとっては宝物だった。毎日毎日寝ないで打ったりしたものもある。和文タイプっていうのは難しいです」というふうに言うんですね。そしてそれを綴じ続けたものを何とか自分の宝物だからと持ち帰ろうと、守衛さんが知り合いだったので何とか許してくださいという事で、持ち帰ったものだという事になるわけです。そういうかたちで持ち帰ったものが、戦後40年過ぎて私たちがアンケートに答えてくれた小林コトさんの家に行って、これを頂いて、それをコピーして展示するということができるまでに至ったわけです。こうした一般の15歳の少女が何で戦争なんてと思うかもしれませんが、こういう偶然が登戸研究所の謎を明かしていくんですね。非常に大きなきっかけになったんだという事を私たちは知ってもらいたいと思います。

それから二つ目の問題は、この登戸研究所の掘り起こしの決定的な役割を担ったのは、教師とか研究者ではなくて高校生だという事です。私たちの調査研究に高校生が加わったんです。ところがその高校生が登戸研究所の人たちに聞く時に、その時の聞き方が大変重要だという事です。大人は、登戸研究所はすごく悪い事をしたんじゃないかなとかたちで接しますが、そうではなくて、戦争中どんなことがあったんですかと真っ白な頭で聞きます。したがって登戸研究所に勤めた人たちは、若い孫のような高校生に対して戦争っていうのはこういう事もあるんだよということを話そうという気持ちになってくれたんですね。そして異口同音に言うことができました。それが、「大人には話さないが、君たち高校生には話そう」。こうして登戸研

究所に勤めた人たちがここに勤めてこんな事をしたんだよという事を語ってくれて、私たちに  
も伝わるようになったわけです。これはすごく衝撃的な事でした。しかし同時に高校生が取り  
組むという事は、別の発想を私たちにもたらしめました。それは陸軍登戸研所保存・活用の意義  
でもあります。「戦争と平和というのはそんな遠い関係ではない。私たちの生き方、どうい  
う生き方を選択するのかと関係する」と高校生が教えてくれました。

そのきっかけは、石井式濾水機の濾過筒が発掘されたという事になります。石井式濾水機の  
濾過筒というのは、石井四郎という 731 部隊を統括する指揮者が細菌戦をやって、自分たちは  
生き残っていくためにきれいな水を供給する、水を濾過するための兵器でした。それが私たち  
に渡されることになりました。それがどういう経過かという、この写真が<sup>(2)</sup>最初に高校生  
が聞き取った時、伴繁雄さんという先程の陸軍技術有功章を取った人で、この少女は北原さん  
という方、若かったのですがもう 40 代で亡くなってしまいました。伴さんは大人の方は向か  
ないで高校生の方を向いて、登戸研究所はこういう事を行ったんだよと話してくれるんです。  
そして、自宅に石井式濾水機の濾過筒がだいたい 700 本から 800 本あったんです。これは現在、  
登戸研究所資料館に全部提供され、展示されています。伴さんは高校生に「濾過筒を調べてご  
らん。大変なことが分かるよ」という事で手渡してくれたんです。これを受け取った高校生は、  
これを作っている工場を探し出しました。日本濾水機という、横浜の井土ヶ谷にある工場で  
した。そこを訪ねると、その社長さんは「これは最初、石井式濾水機ではなかった。自分たちが  
関東大震災で大変な被害を受けて、汚い水をきれいにするために日本濾水機が特許を取ったん  
だ。ところが、それを石井四郎が軍で使うということで特許ごと持って行って、戦争中は石井  
式濾水機というかたちですべてそこに供給されるに至ったんだ」という事を話してくれました。  
高校生はそれを聞いて、「戦争と平和は裏表の関係である。道具として活用するのか、兵器に  
なるのか、これは私たち一人一人の生き方に関わるんだ」という事を私たちに語ってくれま  
した。ですから、登戸研究所は負の遺産というだけではなく、技術そのものは大変な災害時も役  
立つようなものを発明している。そういう面でも、私たちは科学の在り方を問いかけていく上  
で、登戸研究所は重要な場所だったんだという事を知ることができました。

## (2) 「登研会」の結成と果たした役割

ここからが大変重要な、今日お話ししたい内容です。この登戸研究所が保存されるに至った、  
一つの重要な背景に、登研会というものがあります。この登研会がどのようなもので、どのよ  
うな役割を果たしてきたのかという事をお話したいと思います。

今から 39 年前、第一回登研会を開催した時の案内状です。この時は箱根湯本の南風荘で開  
かれ、まだ呼びかけ人も数名で始めました。そして登研会をつくり、第二回は 1984 年に熱海  
のニューフジヤ・ホテルで開かれました。その頃から登研会の活動がさらに活発化していきま

す。そして1986年には、自分たちの思いを伝えていく手段があってもよいだろうという事で、この会をさらに発展させていくことになり、1988年から89年にかけて、自分たちが働いた登戸研究所に跡碑を建てようという運動が始まりました。これが極めて大事なことだと思います。3つの碑文案を作り、一つ目の案は、登戸研究所がやったことを細かく書いている碑です。正面は「陸軍登戸研究所跡碑」と決まっています。第二案として大変珍しい兵器を作っていた場所だという事を書く。そして三つ目の案は「想う」。自分たちが登戸研究所について想う。その下には句が詠まれていて、「過ぎし日は この丘に立ちめぐり逢う」<sup>(3)</sup>。

1988年に、紀州鉄道の熱海ホテルで壮大な第4回登研会が開かれます。その時にどれを選ぶか決めたのですが、その決め方は多数決でした。軍部ですから偉い将校の意見で決

めるのではなく、登戸研究所に勤めた人たちは皆、対等な形で話をし、思いを語り合う事ができる、これが登研会の特徴でした。その登研会が選んだものがどれだったかという、恐らく偉い人が勝手に作るのであれば第一案だと思います。ところが、多数決で「想う」が選ばれた。ここは大変大事なポイントだと思います。

これが決定した碑案です<sup>(4)</sup>。「登戸研究所跡碑」。そして「想う」という字は削除されます。これは皆の共通の想いだから必要ないという事になり、「過ぎし日は この丘に立ちめぐり逢う」という碑文にしました。これがどういう意味なのか普通の人は分かりません。そこで、登戸研究所に勤めた人たちの気持ちを聞くために、私たちは1990年代から精力的に動き出しました。そして私自身は唯一選ばれて1990年代半ばから登研会にも参加しました。この意味を聞くと、不思議な事をいうんですね。「過ぎし日は」というのは、登戸研究所に勤めた日々だと。「この丘に立ち」は、戦後40年過ぎた日々だと。そして戦後40年過ぎて、そろそろめぐり逢って語ってもいい、そういう意味だったのです。

「過ぎし日は」は、それぞれの多様性がありました。15歳くらいで勤めた人たちは川崎北部に住んでいる人々が圧倒的に多く、その人たちが言うには、ほかの工場などに動員されるのと



第2図 第16回登研会 集合写真  
2004（平成16）年撮影（資料館所蔵）



第3図 第15回 登研会のようす  
2003（平成15）年撮影（資料館所蔵）

は違い、条件は良かった。給料も良かった。それから電気技師の資格を取りに夜間学校に行ったとか、機械技師の資格を取ったとか、小林コトさんのようにタイピストの資格を取るために学校へ通わせてくれたとか。面白いのは、英語を学校では勉強しない時代でしたが、ここでは洋書を読めないとだめですから語学学校に通った。ですから、戦後は資格があるから就職に困らなかったなんていう事も話してくれました。しかし、ここで勤めたという事は一切言わない。そして所内に入ると、他の科の人たちや学校の同級生などに会っても話をしない。それから食事も自分の場所で食べる。要するに決まったことしかやってはいけない。そして家に帰っても何やってるかは話さない。しかし、ここに勤めている間にとんでもない兵器を作っているという事は皆さん段々と分かってきたんです。敗戦の時には証拠隠滅命令が出されます。これによって墓場まで持って行こうと解散したわけですから、戦後40年間誰も話すことなく過ごす。そういう日々を過ごしているんです。それがだんだんと苦しくなる。40年過ぎて昭和が終わるといふ時にこの丘に立ってあの時どうだったか話してもいい、そろそろ伝えてもいいと、登戸研究所を話したす象徴的な碑が「登戸研究所跡碑」として作られたわけです。これが作られるのは昭和の終わりですから、平成になってから除幕式が行われます。写真に写っている人が伴さんです（第4図）。このような形で、登研会がそろそろ話してもいいかなと私たちに語り始めた事が最初のきっかけだったとっていいと思います。



第4図 登戸研究所跡碑除幕式  
1989（平成元）年11月撮影（資料館所蔵）

この碑が登戸研究所跡碑、そして背面には「過ぎし日は この丘に立ち めぐり逢う 登研会」と刻まれた登研会の名称で作っている碑があり、これはぜひ見ていただきたいと思います。これが、登戸研究所が保存され、資料館に繋がっていく最大の原点である事を知っていただきたいと思います。

そして関係者が色々な形で語り始めました。この右側の写真（第5図）の、真ん中の人が井上さんという人です。登戸駅付近で戦後は印刷会社などをやっていた人ですが、この人が最初に私たちと出会って名簿をくれたり、登研会との出会いを作ってくれた人です。そして先頭に立っている人が和田一夫さんと



第5図 井上氏、和田氏とともに調査する著者  
1988（昭和63）年7月撮影（個人所蔵）

いう人で、この人は登研会 20 回のうち、後半の事務局長でした。この人が登研会を私たちに紹介し、私も登研会の仲間に入れていただいて、資料を提供してくれた人でした。『昭和とともに生きて（わが人生の足跡）』という体験記もまとめています。これも資料館で現在保存しています。この写真は 1988 年、随分古いですが、この和田さんの後ろにいるのが私です。髪が黒々としていて、本当に三十数年前からやっていたことを示す貴重な写真です。

この登研会の人たちが、実は明治大学に大変貴重な資料を提供するから保存してくれと呼びかけます。最初は 1999 年。明治大学構内には建物がまだたくさん残っていました。登研会はその建物の保存とそれを活用することを求めたわけです。これは戸沢学長の時代でした。まだ建物はたくさんありますから、そういう建物を活用して、なんとか後世に伝えてくれということで出した文書でした。しかしこの時期はまだ学生運動が盛んで、学内にも色々な政治的な対立があったこともありました。ですから、戸沢学長としては、これを残したい面もありましたが、それがなかなか難しいという事で頓挫したのが 1990 年代の終わりの時期でした。

ところが、21 世紀に入ると状況が変わっていきました。そして、2005 年に山田<sup>げんぞう</sup>憲藏さんが登研会の会長となり、陸軍登戸研究所跡の保存と資料館設置の要請というものを出しました。登戸研究所の建物をぜひ資料館にしてくれという事を登研会で決議し、それを求めたわけです。それに対して当時の納谷学長は、これは大事なものだという事で認めて、保存の方向に一挙に向かっていくという事になったものが、「陸軍登戸研究所跡の保存と資料館設置の要請」という文章になります。この要請を出すに至るまでに、登研会は 20 回まで続けていくわけですが、その中で話す内容というのは多様でしたが、自分たちは一人一人が悪いことをしたかもしれない。しかし戦争というのはこういう事があるんだという事を伝えていく上では、大変大事な物なんだという事を皆さん確認されていくようになりました。こうして明治大学は 2010 年 3 月に第二科の建物を利用して資料館を開館します。この建物が風船爆弾の牛疫ウイルスを研究していた建物でした。久葉さんという方が語ってくれたのですが、この建物で瞬時に牛がコロリと死ぬようウイルス兵器を作って、零下 40 度でも生きるようなウイルス兵器にしたんだという事を語ってくれました。それは誇らしげにというものではなくて、苦しく、しかし自分たちが何をやったかという事で語ってくれました。それから松川仁さんもこの建物で働いていて、この人も多く語ってくれました。それは小粒菌核病菌という、稲が枯れるような菌をここで培養して、それを大量に中国で空から撒いてきたと。そういう事を苦しくもあるけれども、しかし伝えていかなければならないという思いで私たちに伝えてくれた内容でした。その小粒菌核病菌もこの建物で作られていたのです。大変危険な生物化学兵器を作っていた建物をそのまま保存して、それを資料館として設立させていくという明治大学の英断と、ここで働いた人たちの思いが凝縮してこの資料館ができ上がっていく、そういう意味では、画期的な取り組みが進められた事をこの経過は示していると思います。



### (3) 登戸研究所遺構の保存と活用を求める市民の動き

そして、市民の保存・活用を求める動きは、その後も並行して進められました。一つは2006年に市民の中で、特に多摩区の人達を中心に「旧陸軍登戸研究所の保存を求める川崎市民の会」が結成されました。そして、9803筆の旧陸軍登戸研究所建物保存の要望署名も集めまして、川崎市議会に提出されました。明治大学は木造の建物については、なかなか保存できないということで、さっきの5号棟という偽札の建物なんかは、壊さざるを得ない。木造はすべて解体されてしまいました。非常に残念なことです。しかしその中で、明治大学としては第二科の、非常に重要な鉄筋コンクリートの建物は残し資料館にするということになりましたし、川崎市議会でもここはやはり文化財の価値があるという事で、映像を撮ったりですね、明治大学にできるだけ保存してくれという要請を出したりするきっかけが2006年から起こってきました。

### (4) 明治大学の登戸研究所遺構の保存と活用を求める動き

そして明治大学について、これは次回の山田朗さんが話すことになると思いますが<sup>(5)</sup>、1995年から学術調査と保存活用の方法が確認されました。そして人文科学研究所の研究テーマとして選ばれて、私もその人文科学研究所の客員研究員として、3年間にわたって全国の調査にあたってきました。その調査の時も、登研会の人たちの援助なしにはできなかったと思います。例えば第1回の登研会の呼びかけ人になった小杉さんという人は奈良県に住んでいました。そして登研会の度に出てこられました。その人は疎開の時に、「兵庫県に自分は移動していたんだよ」ということを話されたので、兵庫県まで私たちは、小杉さんに頼んで案内してもらって、そして兵庫県の小川村という所でいろんな決戦兵器を研究したという事が分かりました。それから、川津敬介さんという人は、福井で偽札工場が疎開する時のための準備をしていた。こういう登研会の人たちの援助を受けながらですね、いろんな形で学術調査が進められたというのも、95年から97年にかけての出来事でした。方々を訪ねる、ただ知らない所を訪ねるといっただけじゃなくて、登研会の人たちの援助を得てですね、研究が進んで、明治大学としても保存の価値を、理解していくきっかけになったというふうに考えております。そして2006年に、明治大学は保存と活用の方針を決めて、それで4年間、資料館作りに入りました。最初、明治大学はこの時にですね、資料館は作っても良いけれど資料は無いんじゃないか、というふうにいうんですね。資料が無いんだったら建物は残すけれど、中は農学部のいろんな機材置き場にしても良いのかなんていう話もありました。ところが、明治大学が資料館を作るということを決めた結果ですね、一つは登研会の人たちが、自分たちはささやかなんだけどこんなものを持っているんだ、という形で登戸研究所のバッヂだとか、あるいは登戸研究所から出征していく時の日の丸だとか、その他いろんな資料を、一人一人は少数ですけれども提供してくれる

という事になりました。そして明治大学の学術調査の結果も踏まえてですね、資料が無い世界が、資料がだんだん集まってきて、そして資料館完成を迎えて、納谷学長はじめ幹部の人たちを迎えて開館に至ったというのが2010年3月の出来事だったわけです。本当に、そこまで来るには登戸研究所に勤めた人たちの努力、そして協力、そして市民の保存運動。こういうものが融合してでき上がってくるという、大変稀にみる取り組みの中ででき上がってきたとって良いと思います。

この第二科の建物、36号棟。ここは資料館ができる前は、大変みすぼらしい物置みたいな場所でもありました。それが資料館にするという事になりました。それでよくよく調べてみると、鉄筋の建物は4棟ぐらいありましたが、これ一つしか残りませんでした。しかし、この構造なんかを見るとですね、ものすごく立派です。鉄筋で天井は高く、本当に稀にみるもので、機密性がある、細菌兵器なんかを作ってもですね、大丈夫と思われました。しかしそこから、外に漏れるものもあったと考えられます。この付近で、当時稲が実らなかったという事件が発生しました。どうもこれは、この建物で作っていた小粒菌核病菌という稲を枯らす菌が、外に漏れ出した結果ではないかと、今では私たちは考えることができますが、当時は生田の人たちは、ここから出た菌だと訴えることもできなかった、というふうにいわれました。しかし、その噂話が、私たちが登戸研究所を調べる直接的なきっかけになったということも考えてみると、この建物が残る意味というのは、大変大きなものがあると思われれます。この付近は蛇もうんと出ます。マムシ谷なんていうのもありますが、そういう蛇の毒なんかも研究した建物がここだと考えてよろしいと思います。

#### (5) 資料館が開館し改めて実感したこと

資料館が開館して10年になりました。この間、大変不思議なことがいろいろ起こりました。登戸研究所に勤めた人で登研会に入らなかった人、そしてまったくその口を開かなかった人が大勢いました。その方々が資料館ができてから、資料館を訪れて来るんです。そして言う事は、ここ(第6図①)にも書いてある「ほっとした」と語るんですね。これは皆さん共通の言葉でした。そして、この①に書いてあるその代表的な例は、70年間沈黙していた元勤務員が来館した時でした。この方は第三科という、登戸研究所の偽札を作る場所に、その紙を抄く場所に15歳で勤めた。これは1943年の年でした。ですから戦争が終わる直前。そして2年間頑張って勤めましたが、敗戦にな



第6図 講演会当日のパワーポイント資料より

りました。そして敗戦処理をして解散するんですが、お前は非常にまじめだ、紙を抄く技術とかいろんなことが素晴らしいという事で、山本憲蔵さんという人に見込まれて、米軍の備員に  
来いという事で雇われるわけです。そしてサンフランシスコに10年間行って、紙を抄いたり  
いろんな登戸研究所の技術的なものの指導をしました。したがって戦前は登戸研究所という、  
偽札を作ったなんていうとんでもないところに居たという体験をした人が、戦後は米軍の備員  
になって、そして二重三重に喋ることのできない人生を送ることになったんです。ところが、  
70年間沈黙していた彼がですね、登戸研究所資料館に来て、それで偽札の事も非常に詳しく  
展示されていました。そして、戦後は米軍の備員になった人もいるという事も展示に書いて  
います。「ああ、自分が沈黙している必要はあまり無いんだな」ということで、ずっと説明を聞  
いて、「ほっとしました」と涙ぐんで語ってくれました。この人とは死ぬまで付き合いました。  
そういう方ですが、そういう勤めた人たちの思いというのは、悪いことをやったという思いを  
抱えながら、しかしそれを話しちゃいけないという苦しみ。この中で人生のほとんどを過ごし  
てきた。このような人たちを、本当に心から解放していく意義がですね、この資料館にあった  
んだというふうに、私たちは今では考えています。ですから戦争というのは、その時苦しいだ  
けじゃなくて、70年間も苦しみ続けるような歴史を背負わせることになる。そんな歴史をで  
すね、私たちは考えると同時に、資料館ができたという意味をですね、単に過去に何をやった  
のかを伝えるだけではなくて、そこに勤めた人たちの気持ちを心から解放して、そして戦争の  
ない時代、平和な時代を作っていく意味を、私たちは本当に真剣に考えていくことができるこ  
とが大事だなと思っているわけです。この①についてはですね、私たちは資料館ができてから、  
何度も何度も体験した話でした。そして資料館としては、体験者から証言会として聞くという、  
話を何度もしてくれるという契機になりましたし、それから関連することと言いますと、風船  
爆弾を作った女学生の方々。この人たちもまじめにやったわけですね。それを話さないで  
きた。それを今はもう話しても良いんだということで、高知とか、あるいは高崎とか、方々の当時の  
女学生が語ってくれるという事にもつながっていきました。ですから、資料館があるかないか  
ということは、本当に決定的に違うものだと考えています。それと関連して、資料館ができた  
結果、登戸研究所所員の遺族からいろんな資料の提供も受けることができるようになりました。  
ですから戦争遺跡として残っているだけじゃなくて、資料館が作られてくる30年間の軌跡の  
到達点が、私たちに大きく励まし、そして新しい研究の道筋を作ってくれたと思っています。

それから二つ目は、資料館ができてから中学生・高校生・大学生が大勢訪れます。毎年訪れ  
る高校、中学があります。この生徒たちは、やはり自分たちが学校で学ぶ戦争と違うんだと、  
そういう事を実際体験されると思います。風船爆弾なんかもそうですし、風船爆弾一つ教科書  
で習ったことがない。ほとんど風船爆弾について学ぶ機会というのは無いと思います。しかし  
風船爆弾は結果は大したことは無かったけれども、オレゴン州で子供たちを、風船爆弾に触れ

て殺してしまうという残虐な事件も起こしているわけです。ですから、戦争というものは、本当に何の罪もない人たちを殺すことになるんだということを、痛感してもらえることができるのが、この登戸研究所資料館の意義ですし、そして実物をいっぱい置いていますので、そのことから学んでもらう事も大変多いことだと考えております。

それから三つ目に、登戸研究所を通じた平和教育。これは海外に向けても発信できているという事が大事だと思います。今、オランダの大学院で研究している人が、ここに来ましてですね、やはり日本にもこういう資料館ができて、そして戦争を考えさせる場がある。これを世界にも広げなくちゃいけない。そんなふうに語ってくれた人もいます。登戸研究所資料館の設立そのものの方針として、平和教育登戸研究所の資料館と名付けました。その目的は平和教育に役立てよう、そして科学教育に役立てよう、歴史教育に役立てよう。こういう事になっているわけです。そういう意味で、登戸研究所を通じて若者に伝えていく、そしてさらに、その次の世代にもつなげていく。そういう、この資料館が開館された事は大変大事なことではないかと思えます。

## (6) 今後の課題について

### ①大学・行政・市民の連携による文化遺産登録

今後の課題について触れますが、大学・行政・市民の連携による文化遺産という事を考えています。「負の遺産」を、平和を創造する文化遺産に、ということで私たちは市民と一緒にずっと取り組んでまいりました。2019年第1回の川崎市地域文化財というのが選定されましたが、この中に、なんと登戸研究所遺跡群というのが指定されました。したがって、川崎市の文化遺産として継承されていく、一つの内容としてこの登戸研究所が選ばれたということは、かなり決定的に重要な意味があると思っている次第です。この点では、川崎にもいろんな戦争遺跡がありますが、連関してですね、東部62部隊とか日吉台地下壕だとか、そういうものも含めてですね、戦争が過ぎてもう75年を過ぎました。しかし、その戦争が単に過去のものでなくて、未来を照らすときにどんな意味があるのか、という事で私たちは、この地域文化財として今後も見返し続けていくという事が大事ではないかと思っている次第です。

### ②若い世代への継承

そして、歴史教育・平和教育・科学教育の発信・受信の場に、ここをしようということが、最後の結論になりますが、若い人が最近多く来館しているというのは、先程もお話しました。今も高校生が、調査を継承しています。とりわけ、駒ヶ根市の方では、この登戸研究所資料館ができて、やはりそれと連携して資料館を作ろうという動きが、昨年あたりから急激に展開されています。駒ヶ根市にはですね、1945(昭和20)年の4月以降、登戸研究所の第二科を中

心として多くの人たちが移動して、そこで松代大本営ができた暁には、天竜川からのぼってくる米軍を最終的に阻止しようという事で、いろんな謀略兵器を研究しています。毒入りチョコレートなんかもやっていますし、最近の研究成果では登戸研究所の人が使った机の中から、どうもワクチン研究をしていたんじゃないかという事が発見された<sup>(6)</sup>。だからこれは、細菌なんかを撒いて自分たちはワクチンをやって生き延びる。そういうものでもあったんじゃないかとか、新しい研究成果が今でもできています。そして、その駒ヶ根市には残っているいろんな遺跡がまだあって、そこを駒ヶ根市の文化財として、博物館を作ろうという動きが、現在進行形で進んで、そしてこの登戸研究所の、明治大学の資料館と連携してですね、日本の戦争の中の負の遺産。これを伝えていくネットワークを作ろうという事が進んでいます。その中には、駒ヶ根市の赤穂高校平和ゼミナール。そういう人たちが今でも活動しています。川崎でも法政二高。今年はそうでもないかもしれませんが、去年あたりまでやはり体験者から聞いたりしながら、語り継ぐ活動をしていました。こうして若い世代にも継承されていくことができる。これが、非常に重要なポイントだと思います。

## おわりに

以上ですが、先程から申し上げましたように、主要参考文献について少し紹介しながら、復習していきたいと思いますが、齋藤充功さんが『謀略戦 ドキュメント陸軍登戸研究所』というのを書いたのが1987年でした。私たちが調査をする、本当に同じ時期でした。そして、駒ヶ根市の木下健蔵さんという人は、『消された秘密戦研究所』、これは1994年。これは駒ヶ根の高校生が、やはり伴さんの聞きとった内容から励まされて、木下さんが私たちと一緒に研究し、本をまとめられました。そして、伴さんそのものがですね、2001年に『陸軍登戸研究所の真実』というのをまとめます。この本のいきさつを、ちょっと紹介したいと思いますが、伴さんは第二科のですね、謀略兵器。青酸ニトリルとかですね。その研究開発をして、南京で人体実験をした人でもありました。その人が、登研会の碑を建てる、その代表になったんですね。それが1988年です。その1988年に伴さんは登研会の碑を建てる。そして、登戸研究所の事をそろそろ話しても良いかなというふうな思いに駆られたと思います。そして、皆さんに原稿を頼んで、いろんな生原稿を集めます。それを集めながら、本になる前に亡くなってしまいました。したがって、生前はこの本を出版することはできませんでした。その原稿を、私が引き継いだわけです。そして、なんとか本にまとめていこうという事が出したのが『陸軍登戸研究所の真実』という本でした。この本の中の特徴としては、戦前登戸研究所がどんなことをやったかというのを、いろんな人に手記を書いてもらって、まとめた所に特徴があります。ですから松川仁さ

んという人からは、中国で細菌戦をやったこと。あるいは、久葉さんという人からは牛を殺すウイルスの研究開発をどういうふうに行ったのかとか。そういう事を細かく書いている、非常に重要な資料になりました。伴さん自身が、南京で人体実験したことを初めて原稿にまとめています。その生原稿を見てですね、私はびっくりしました。中国南京で人体実験をした。例え戦争中といえども、申し訳なかった。冥福を祈ると書いていますね。その事を奥さんに確かめましたら、奥さんは伴さんがその原稿を書いたときに「お前にも長い間すまなかったな」というふうに語ってくれたというんですね。やはり伴さんそのものが、人体実験をやったりしながら登戸研究所の幹部として働いた。しかし、やはり悪いことをした、何とか謝りたいという思いを抱えながら、戦後も生きていたという証だと、それを私たちは出すことができたということで、大変重要な本だと考えております。ただし、戦後については非常にその、書いてはならない事があったかもしれませんが、いろんな原稿の中に違いがありました。したがって、この本は戦後編も伴さんは書いていましたが、それについては省略したという所に、一つの特徴があります。その他、大学の研究グループで書いたものが『陸軍登戸研究所』、青木書店。それから『駿台史学』。それから山田朗さんとか私たちが書いたものとか。私自身も2012年に『陸軍登戸研究所と謀略戦』というものをまとめています。そういう中で、やはり大事なことは、単なる研究者がこういうものを行ったんだという形ではなくて、体験した人たちが本当に苦しみながら心を開いてくれて、その内容がこの登戸研究所の資料館の方々に詰まっているということ。そして、資料館そのものが後世に細菌戦とか、そういうものをやる場合にこんな建物で行ったんだ、という事を伝えていく。そういう意味で、この登戸研究所資料館というのは、本当に稀に見る資料館ではないかと私自身は思っています。ぜひ、4月ぐらいから開館できた暁には訪れて頂いて、登戸研究所の実態・実相、そしてこれが明らかになって来た歴史的な背景等々をですね、考えていただければと思います。

今日は本当に、直接皆さんの顔を見て話し、そして質問なんかを受け付けたいところだったんですが、こういう機会ですから全くできませんでした。申し訳ありませんが、またの機会をぜひ期待しております。どうもありがとうございました。

〔注〕

- (1) 『明治大学平和教育登戸研究所資料館ガイドブック』p.12, 「1960年代の生田キャンパス」参照。
- (2) 本誌 p.10, 第17図参照。
- (3) 本誌 p.7, 第9図参照。
- (4) 本誌 p.8, 第11図～第12図参照。
- (5) 2021年5月15日に開催した。『明治大学平和教育登戸研究所資料館 館報』第8号(2022年9月発行予定)に掲載予定。
- (6) 駒ヶ根市地域交流センター(赤穂公民館)にて2021年2月23日に開催された登戸研究所調査研究会主催「登戸

研究所シンポジウム」, 井上直人氏報告より。

**〔追記〕**

本稿は, 2021 年 3 月 20 日 (土) Zoom のウェビナー機能を利用して開催したオンライン方式の講演会「登戸研究所掘り起こし運動 30 年のあゆみ」(企画展「極秘機関『陸軍登戸研究所』はこうして明らかになった」関連イベント)を基に構成した。

## 明治大学平和教育登戸研究所資料館 2020年度年次報告

---

### 1. 2020年度活動概要及び2021年度にむけての展望

館長 山田 朗

#### 開館11年目、コロナ禍のため来館者は150人に止まる

2020年度は開館11年目を迎えたが、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため前年度の3月1日以降臨時休館措置をとり、11月11日より本学学生、職員に限定して開館した。開館日数67日（うち特別開館0日）で来館者150名、回収アンケート0通であった。平均来館者数は、1ヶ月あたり30.0名、1日あたり2.2名になる。前年度（開館日数189日、来館者6,546名、回収アンケート1,425通、1ヶ月あたり545.5名、1日あたり34.6名）に比べて来館者数2.3%になった。開館以来最も少ない年間来館者数となり、開館以来の通算来館者は、2021年3月末で8万452名である。

新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、対面での定期見学会・企画展関連講演会・展示解説会・開館10周年記念イベント等は全て中止となった。学校見学は、1校（本学）・33名（前年度:27校・616名, 5.4%）、グループ見学（学校見学を除く）が1グループ（学内）・8名（前年度:110グループ・1,711名, 0.4%）であった。新型コロナウイルス感染症関係のキャンセルは、学校見学が12校・612名（人数未定分を除く）、グループ見学（学校見学を除く）が27グループ・588名（人数未定分を除く）に及んだ。

#### 展示内容の点検、資料の収集

登戸研究所の実態解明は依然として進行中であり、資料館独自の調査と来館者からの情報提供によって不断に展示内容を点検している。2020年度は、動物慰霊碑バナーを第三展示室に設置した。また、所蔵資料の増加に対応するために、生田キャンパス内にさらなる収蔵スペースを確保することには一定の目処がたった。

資料の収集・調査研究という点では、大学構内での旧登戸研究所が使用した可能性のある村万製陶製小便器の偶然の発掘があった。

登戸研究所勤務者2名への聞き取り調査、また風船爆弾製造に動員された延岡高女卒業生6名へ郵送でのアンケートをおこなった。



## 企画展・イベントの実施

2020年度は企画展として「極秘機関『陸軍登戸研究所』はこうして明らかになった—登戸研究所掘り起こし運動30年のあゆみ—」を開催した。企画展関連イベントとして、オンラインで講演会2回と企画展解説をYouTubeで公開した。例年11月に開始する企画展は、新型コロナウイルス感染症の拡大によって1月13日から開始した。なお、2019年度の企画展「少女が残した登戸研究所の記録」は3月以降の臨時閉館措置で中断のやむなきに至ったが、11月11日の学内限定開館後に再開、1月9日まで開催した。

新型コロナウイルス感染症拡大のため、例年5月に開催してきた国際博物館の日イベントは、2020年度は開催できなかった。また、全学共通総合講座「登戸研究所から考える戦争と平和」に連動した資料館主催の見学会（例年月2回・土曜日）も開催できなかった。

## 教育・研究活動

2020年度も上記全学共通総合講座を春学期には生田キャンパス、秋学期には駿河台キャンパスで開講したが、全てオンライン（オンデマンド配信方式）での実施となった。また、例年、春期・秋期にそれぞれ5回の連続講座として開催してきたリバティアカデミーの生田講座は、新型コロナウイルス感染症拡大のため中止となったが、12月19日にリバティアカデミーオープン講座「オンライン登戸研究所講座：登戸研究所の『秘密』の全てをお見せします」を開催することができた。総合講座の授業とリバティアカデミーの連続講座は、2021年度以降も継続していく予定である。

研究に結びつく活動として例年行ってきた戦争遺跡の調査等は、実施できなかった。

資料館の調査・研究活動の成果をより広く普及するために、2020年度も『資料館館報』第6号の刊行と図書館・資料館等への配付を行うとともに英語版ガイドブックを製作した。

## 地域・社会との連携活動

稲田郷土史会、登戸研究所保存の会と共同で、多摩区内の元登戸研究所勤務者の聞き取り調査を継続中である。

職場体験は行わなかったが、学芸員実習生の受け入れは前年度と同様に行った。

## 宣伝・広報活動

2020年度は大学ホームページの資料館専用ページを改善するとともに、資料館独自の広報手段として『資料館だより』第19号、第20号（それぞれ2020年7月、2021年1月）を発行した。

臨時閉館を余儀なくされている中、YouTubeでの動画配信を開始した。中でも過去好評だっ

た帝銀事件講演会は再生回数を 3,000 回以上、次いで 10 周年を記念した動画は 1,000 回を記録している。また既存の SNS もコンテンツを増やし、増強した。

2020 年度は、新聞社 2 件、テレビ局 4 件、合計 6 件の取材を受けた。企画展に際しては、郵送、Eメールでの広報活動を行い、各キャンパスでのポスター掲示を行った。来館者アンケートによって寄せられた声は、資料館にとって重要な情報源であったが、2020 年度は 0 件であったため、大学や資料館自体の広報宣伝活動の効果を検証することができなかった。

## 2021 年度にむけての展望

開館 11 年目は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、来館者数・アンケート回収数は開館以来もっとも厳しい状況となった。しかしながら、オンライン講演会に際してのアンケート調査等では、企画内容に対しては好意的な評価を受けることが多かった。そういったことに甘んじることなく、資料館は今後も展示内容の充実と来館者対応のさらなる向上に努めていかなければならない。また、オンライン企画を対面代替措置としてのみ捉えるのではなく、全国あるいは外国にも発信していく方法として今後も展開の仕方を工夫していく必要がある。

また今後、対面企画の再開に際しては、近年、課題として浮かび上がったグループ見学・学校見学の増加を図るための受け入れ体制の強化が必要である。また、見学会・企画展解説会だけでなく、特定展示室解説会などの機会を増やすことも考慮しなければならないだろう。

調査によって訂正・改善が必要と認められた展示パネルについては今後も改修するとともに、新たに収集した物品・資料やレプリカを効果的に展示することが急務である。2021 年度には、常設展示パネル・解説ビデオなどの全般的なリニューアルに向けての取り組みを始められるように準備を進める。また、陸軍科学研究所作成の「文鎮」レプリカの展示を始める。

生田キャンパス内の登戸研究所関係の遺物を保存し、戦争遺跡として保存・整備することにも努め、引き続き国の登録文化財指定に向けての作業を進めたい。また、明治大学各キャンパスの戦争遺跡の保存・活用についても提案をしていきたい。

『資料館館報』をさらに充実させるとともに、懸案である『図録』の編集準備を始めたい。

「平和教育の発信地」としての役割を高めるために、資料館・学内遺跡を案内できるガイドの養成を進めることも大切な課題である。

## 次の 10 年にむけての展望

2010 年に開設された資料館は、その後 10 年にわたって展示内容とイベントの充実に努めてきた。開設時に制定した「設置趣旨」(ありのままの史実を直視する歴史教育・平和教育、過去の批判的検討に根ざした科学教育の発信地であり、地域連携の拠点であること)をふまえつつ、今後の中長期にわたる資料館の展望について提起しておきたい。

### ①平和教育の発信地としての機能の強化

資料館は「平和教育」を名称に組み込んでいる原点を見つめ直し、明治大学における平和教育の中核組織として、教員・学生への働きかけを強めなければならない。また、明治大学の枠にとらわれることなく、広く社会人に発信するとともに、高校生以下の次世代の人々に戦争の記憶を語りついでいく活動を重視したい。その際、戦争における被害と加害の問題を常に意識しながら、過去の問題を現代に生かしていく、未来を構築するための過去の検証という立場を堅持していく。

### ②地域連携の拠点としての活動の強化

資料館は、川崎市民による登戸研究所遺跡保存運動が資料館存在の原点であることを常に想起し、地域における戦争遺跡の発掘、戦争の記憶の継承活動の一翼を担うとともに、川崎市や長野県の市民をはじめ、全国の戦争遺跡保存、戦争の記憶継承を志す人々との連携を重視する。各地の博物館・資料館との情報交換に努め、資料館の質的向上に努める必要がある。

### ③戦争の実態を直視する調査・研究活動の重視

登戸研究所の活動は、「水面下の戦争」「裏側の戦争」と呼ばれる分野であり、倫理上・国際法規上、多くの問題点を有するものであるが、加害の側面を含め、史実を後世に確実に伝えていくために、調査・研究項目にタブーを設けず、また明らかになった史実は常に公開していく姿勢（個人のプライバシーに配慮しつつ）を大切にしたい。戦争遺跡のフィールドワーク、登戸研究所関係の残存文書の調査・保存、関係者への聞き取り調査などを継続する。

### ④調査・研究活動に裏打ちされた展示内容の充実

現在の常設展示パネルとレプリカによって登戸研究所の活動の概要を掴むことは可能であるが、登戸研究所の実態解明は未だ発展途上であり、資料館による調査・研究活動に裏打ちされた展示内容と企画の充実がさらに必要である。

最新の調査・研究の成果に基づき、各展示室の常設パネルや解説ビデオの改修を順次進める。その際、資料館のグローバル化の一環としてパネル・キャプションの多言語化を視野に入れる。

また、イメージが湧きにくい分野、例えば、秘密戦（諜報・謀略戦）兵器・「ち号兵器」・風船爆弾の高度維持装置等のレプリカを順次作成していく。

ガイドブックの内容を常に検証し、より若い世代にとって理解しやすいものにしていく。

### ⑤調査・研究活動に裏打ちされた企画・教育活動の充実

平和教育・歴史教育・科学教育の発信地にふさわしい企画展を毎年開催するとともに、企画展・講演会・展示解説会を継続する。その際、帝銀事件や登戸研究所勤務員の戦後など、戦後史に関わる分野にも常に目を配る。また、大学の授業やリバティアカデミーでの発信・教育活動を継続するとともに、資料館と関連遺跡の解説ができる人材を養成していく必要がある。

## 2. 開館状況

### (1) 新型コロナウイルス感染症拡大の影響

- ・ 臨時閉館期間 3/ 1 (日) ~ 11/10 (火)
  - ・ 学内関係者限定開館 11/11 (水) 以降
- 年度を通して一般来館者を対象とした開館はできなかった。

### (2) 来館者状況 (月次)

【表 1】 来館者・アンケート回収 月別集計表 (2020 年 4 月 1 日 ~ 2021 年 3 月 31 日)

月	開館日数 (日)	月別 来館者 (人)	1日あたり 平均来館者数 (人)	年度内 来館者累計 (人)	アンケート 回収数	年度内 アンケート 回収数累計
4月	0	0	0	0	0	0
5月	0	0	0	0	0	0
6月	0	0	0	0	0	0
7月	0	0	0	0	0	0
8月	0	0	0	0	0	0
9月	0	0	0	0	0	0
10月	0	0	0	0	0	0
11月	12	59	4.9	59	0	0
12月	12	33	2.8	92	0	0
1月	13	18	1.4	110	0	0
2月	14	17	1.2	127	0	0
3月	16	23	1.4	150	0	0
合計	67	150	2.2		0	

### 【参考】

年度	開館日数 (日)	来館者数 (人)	月平均来館者数 (人)	日平均来館者数 (人)	アンケート 回収数
2010 年度	208	11,185	932.1	53.8	1,199
2011 年度	215	6,751	562.6	31.4	1,657
2012 年度	218	7,019	584.9	32.2	1,698
2013 年度	217	6,889	574.1	31.7	1,318
2014 年度	224	8,733	727.7	38.9	1,849

2015年度	219	8,176	681.3	37.3	1,685
2016年度	207	7,595	632.3	36.7	1,368
2017年度	207	8,314	692.8	40.2	1,592
2018年度	207	9,094	757.8	43.9	1,877
2019年度	189	6,546	545.2	34.6	1,425
2020年度	67	150	30.0	2.2	0
合計	2,178	80,452	648.8	36.9	15,668

注) 臨時休館が生じた2019年度は11カ月、2020年度は5カ月でそれぞれ算出。なお、2019年度の来館者数は今回修正した。

【表2】開館日月別データ（2020年4月1日～2021年3月31日）

月	開館日数	通常開館日数 (水～土)	特別開館日数※ (日・月・火)	特別開館日
4月	0	0	0	
5月	0	0	0	
6月	0	0	0	
7月	0	0	0	
8月	0	0	0	
9月	0	0	0	
10月	0	0	0	
11月	12	12	0	
12月	12	12	0	
1月	13	13	0	
2月	14	14	0	
3月	16	16	0	
合計	67	67	0	

※特別開館日：通常開館日（水～土）以外の事前団体予約等による開館日。

### (3) 学校見学等

1校（グループ）33名。内訳は本学理工学部建築学科の2スタジオ（研究室）計33名。昨年度（2019年度 27校・616名）より大幅に減少した。新型コロナウイルス感染症拡大の影響で学校見学が8校・412名（人数未確定分を除く）がキャンセルとなった。

### (4) グループ見学

学内職員の1グループ8名。昨年度（2019年度 110グループ・1,711名）より大幅に減少した。新型コロナウイルス感染症拡大の影響で27グループ・588名（人数未確定分を除く）がキャン

ンセルまたは次年度以降の延期となった。

**【参考】**

年度	学校見学等	グループ見学	
2010 年度	10 校 / 400 名※1	109 グループ / 3,374 名	※1 概算
2011 年度	23 校 / 378 名	177 グループ / 3,718 名	
2012 年度	34 校 / 1,367 名	149 グループ / 2,532 名	
2013 年度	29 校 / 1,329 名	124 グループ / 1,811 名	
2014 年度	34 校 / 1,845 名	219 グループ / 2,952 名	
2015 年度	42 校 / 1,182 名	163 グループ / 2,797 名	
2016 年度	35 校 / 1,361 名	141 グループ / 2,481 名	
2017 年度	32 校 / 1,220 名	176 グループ / 2,684 名	
2018 年度	45 校 / 509 名	139 グループ / 2,348 名	
2019 年度	27 校 / 616 名	110 グループ / 1,711 名	
2020 年度	1 校 / 33 名	1 グループ / 8 名	

### 3. 資料

#### (1) 2020 年度まで所蔵資料点数

・実物資料

1,985 件 全 4,233 点

・視聴覚, 記録資料 (証言映像, 登戸研究所に関するテレビ番組の映像など)

335 件

#### (2) 2020 年度収集資料

キャンパス内から発掘された登戸研究所が使用した可能性のある村万製陶製小便器を収蔵, 外部からは防空用防毒マスク, 南満州鉄道株券などが寄贈された。また企画展準備のため, 戦後に発行された雑誌記事, 登戸研究所研究の過程を示す写真などを収集した。

・実物資料

収集資料点数 34 件, 全 156 点

資料名		件数
大分類	小分類	
1. 登戸研究所	研究所建物付属物	1 件 (1 点)
2. その他	防空備品	1 件 (2 点)
	写真類	23 件 (23 点)
	戦前発行証券類	3 件 (124 点)
	雑誌類	6 件 (6 点)

・視聴覚・記録資料

収集資料点数 全 9 件 (映像 7 件, 音声 2 件)

(3) 2020 年度証言収集状況

登戸研究所勤務者 2 名

風船爆弾動員女子学生 延岡高女卒業生 6 名

(4) 今後の資料収集および史跡保存について

登戸研究所の実態を明らかにしていくためには、登戸研究所関係者だけではなく、他の陸軍技術研究所関係者へも調査対象を広げていくことが必要である。戦争体験者が少なくなっている今、ご存命の関係者への聞き取り調査は早急に行っていかなければならない。すでに本人が鬼籍に入っている場合も、資料散逸を防ぐため、早急に遺族への調査と聞き取りを行うことが求められる。

後世に「登戸研究所」を確実に遺していくため、生田キャンパス内の史跡保存に引き続き勤める。特に、第一校舎 1 号館裏手の建造物が今後予定されている校舎建て直しにより消失することがないようにする。また、現ヒマラヤ杉並木一帯に第二中央校舎の建設が決定されたが、引き続きヒマラヤ杉並木一帯の可能な限りの景観保存と歴史的な記憶の継承について大学に働きかけていく。

## 4. 活動内容

(1) 新型コロナウイルス感染症拡大の影響により中止した活動

・資料館主催見学会

- ・ オープンキャンパスイベント
- ・ 開館 10 周年記念祝賀会

## (2) 企画展

### ①概要

2021 年 1 月 13 日（水）から 7 月 3 日（土）まで「極秘機関『陸軍登戸研究所』はこうして明らかになった—登戸研究所掘り起こし運動 30 年のあゆみ—」を資料館内で開催。テキストパネル 12 点（挨拶・謝辞除く）、資料 34 点（複製含む）の計 46 点の展示を行った。新型コロナウイルス感染症拡大のため、初日よりオンラインでも展示パネル、一部の資料を公開している。

各種関連イベントはオンラインで行う。今年度末までの来場者数は学内向け限定的公開期間中のため 53 名。

### ②企画展開催時の総来館者数

	開催期間	会期中 開館日数 (日)	来館者数 (人)	日平均 (人)	アンケート (件)	日平均 (件)
第 1 回	2010/11/03 ~ 2010/12/18	31	2,046	66.0	203	3.1
第 2 回	2011/10/26 ~ 2011/12/17	41	1,515	37.0	416	10.2
第 3 回	2012/11/21 ~ 2013/03/09	59	2,140	36.3	399	6.7
第 4 回	2013/11/20 ~ 2014/03/29	72	2,474	34.4	488	6.8
第 5 回	2014/11/19 ~ 2015/03/21	69	2,831	41.0	524	7.6
第 6 回	2015/08/05 ~ 2016/03/26	141	5,365	38.6	973	6.9
第 7 回	2016/11/16 ~ 2017/03/25	67	2,684	40.0	388	5.7
第 8 回	2017/11/22 ~ 2018/03/31	70	2,882	41.2	671	9.6
第 9 回	2018/11/21 ~ 2019/05/11	93	5,077	54.6	1,297	14.0
第 10 回	2019/11/20 ~ 2021/01/09 <sup>※1</sup>	78	1,978	25.4	476	9.2
第 11 回	2021/ 1 /13 ~ 2021/03/31 <sup>※2</sup>	41	53	1.3	0	0.0

※1 当初の予定会期（～ 3/31）から延長。3/ 1～ 11/10 まで臨時閉館。11/11～ 1/ 9 は学内限定開館。

※2 実際の会期は～ 7/ 3。2020 年度中は学内関係者の限定的開館期間。

### ③関連イベント

#### 【今年度中に開催した企画展関連イベント】

- ・ オンライン（ウェビナー）講演会（1）「登戸研究所掘り起こし運動 30 年のあゆみ」  
2021 年 3 月 20 日（土・祝） 講師 渡辺賢二（展示専門委員）



申込人数 118名 参加者 95名

配信 YouTube 再生回数 288回 (2021年5月1日現在)

#### 【2021年度に開催する企画展関連イベント】

- ・オンライン (ウェビナー) 講演会 (2) 「資料館開館に向けての明治大学の取り組み」  
2021年5月15日 (土) 講師 館長 山田朗 (文学部教授)
- ・企画展展示解説 YouTube 配信 講師 館長 山田朗

#### ④報道

朝日新聞, 読売新聞, タウンニュース多摩区版の3紙に企画展等について掲載された。

#### (3) 常設展示

第三展示室に動物慰霊碑バナーを追加。

#### (4) 調査・研究活動

- ・元登戸研究所勤務員らからの証言収集活動
- ・宮崎県延岡市の延岡高女から小倉造兵廠へ風船爆弾製造に動員された女学生へのアンケート調査

#### (5) 教育ツールの充実

- ・資料館ガイドブック英語版製作

#### (6) 地域社会および外部と連携した活動

##### ①川崎市民との連携

稲田郷土史会, 登戸研究所保存の会と共同で多摩区内の元登戸研究所勤務者の聞き取り調査を継続中。

##### ②職場体験・博物館実習生などの受け入れ

種別	学校・人数	期間
職場体験	なし	-
地域インタビュー	なし	-
博物館実習	明治大学4名	2020年11月30日～12月1日, 12月7日～11日 (2名ずつ, 各5日間)

## (7) 資料利用・閲覧および調査依頼状況

資料利用申請は 17 件あった。主にデータでの写真提供など。申請者内訳は出版物や Web サイト掲載用データ貸出または撮影が 1 件，放送用データ貸出が 8 件，展示用資料貸出または撮影 3 件・研究目的のデータ貸出または撮影が 3 件，講演会等教育目的での使用が 2 件。

その他，報道関係者や研究者ほかより風船爆弾，偽札（第三科の活動），旧登戸研究所嘱託研究者に関する内容，また，近隣在住の中学生からの調べ学習に関する問い合わせが計 18 件あった。

## (8) その他事業

- ・「陸科研 勅諭下賜五十周年記念」文鎮の複製（依頼先：共立模型）

# 5. 広報

## (1) YouTube 動画配信

今年度より広報課の協力を得て，新たに YouTube での動画配信を開始し，3 本の動画配信を開始した。

- ① 2018 年 12 月 15 日講演会「帝銀事件と陸軍登戸研究所」 8 月 21 日配信

再生回数 3,718 回

- ② 「明治大学平和教育登戸研究所資料館 10 周年を迎えて」 12 月 23 日配信

再生回数 1,082 回

- ③ 「2019 年度明治大学平和教育登戸研究所資料館 第 10 回企画展展示解説 少女が残した登戸研究所の記録 - 陸軍登戸出張所開設 80 年 -」 2021 年 2 月 18 日配信

再生回数 465 回

(2021 年 5 月 1 日現在)

## (2) ホームページ

ホームページではニュースやイベントの情報を随時更新している。2020 年度は昨年度開催した第 10 回企画展「少女が残した登戸研究所の記録」展示パネルと記念講演会の記録、『館報』第 6 号、『資料館だより』第 19 号，第 20 号の PDF が新たにダウンロード可能になった。

## (3) SNS

2013 年 5 月 6 日の開設以来，職員がイベントの周知や「#ステイホームで登戸研究所」シリー

ズなどを投稿している。

< Facebook >      フォロワー数      784 人（前年度 721 人）

< Twitter >        フォロワー数      1,296 人（前年度 961 人）

< Instagram >      フォロワー数      98 人（前年度 49 人）

（2021 年 4 月 30 日現在）

#### （4）『明治大学平和教育登戸研究所資料館 館報』

第 6 号（2020 年度）を 2020 年 9 月 30 日に発行した。内容は第 10 回企画展「少女が残した登戸研究所の記録」記録，2019 年度年次報告など。2021 年 9 月に第 7 号を発行予定。『館報』掲載論文は，資料館ホームページおよび明治大学学術成果リポジトリでも公開している。

#### （5）『資料館だより』

第 19 号（2020 年 7 月 1 日），第 20 号（2021 年 1 月 29 日）を発行した。臨時閉館中，また学内関係者限定開館中であったため，インターネット上での発行のみとした。既刊分を含め，資料館ホームページからのダウンロードも可能。

#### （6）取材

新聞社 2 件，テレビ局 4 件の取材があった。

## 6. 来館者感想

- ・とても魅力的な場所でした!! コロナに勝つ! (男性)
- ・久しぶりにこの資料館を見学させていただきましたが，見るたびに新たな発見があり，本当に勉強になります。長くこの資料館を継承していただきたいと思います。(男性)

(以上，意見交換ボードより)

以 上

## 編集後記

『明治大学平和教育登戸研究所資料館 館報』第7号をお届けします。本号は、資料館の2020年度（2020年4月～2021年3月）における活動報告が主な内容です。2020年度は、新型コロナウイルス感染症拡大防止のために、大学が一般来館者の入構制限を実施した関係で、年間来館者150人という、開館以来の事態となりました。しかし、そのような中でも資料館スタッフは、企画展の開催やオンラインによる発信に努力してきました。

本号は、第11回企画展「極秘機関『陸軍登戸研究所』はこうして明らかになった—登戸研究所掘り起こし運動30年のあゆみ—」の記録が中心になっています。

展示内容解説「極秘機関『陸軍登戸研究所はこうして明らかになった』は、本企画展担当チーフの本資料館学芸員・塚本百合子が作成したものです。この企画展は、本資料館の開館10周年にちなんで、資料館が開設されるに至るまでの市民運動・「登研会」（登戸研究所に勤務した人たちの有志団体）・大学の活動とその連携の歴史を改めて振り返ったものです。常設展示では第5展示室のパネル1面で説明されていることが、これほどまでの多様な活動の連携・集積の結果だったことが確認できる内容となっています。

講演会①「登戸研究所掘り起こし運動30年のあゆみ」は、2021年3月にオンラインで開催された渡辺賢二先生の講演の記録です。渡辺先生を中心とした川崎市民・高校生たちの活動が、「登研会」の方々の証言や資料を引き出し、相互に連携しながら、川崎市の行政の支援も得ながら、登戸研究所と戦争の記憶を継承していく大きな取り組みになったことを明らかにしています。これは、現在、日本の各地で展開されている戦争遺跡保存運動、戦争の記憶継承の取り組みにも大きな刺激を与える内容になっていると思います。なお、講演会②「資料館開館にむけての明治大学の取り組み」は、年度をまたいでの開催になりましたので、その記録は、次号の館報に掲載いたします。

資料館は、新型コロナウイルス感染症拡大防止のために2020年度は、ほとんど臨時休館措置をとらざるを得ませんでした。各種のオンライン企画などを通じて、発信を続けています。今後とも館員一同、オンラインを含め、展示の質の向上と見学者対応のさらなる改善を目指して精進いたしますので、忌憚のないご意見をいただきますようよろしくお願いいたします。

(文責・山田朗)

館報第6号に関し、お詫びと訂正をいたします。

〔お詫び〕

p.50 図17について、発行元廃業のため、当該資料、進藤進編『日支国語辞典新辞林』（研文書院、1941年）は掲載許諾を得ることができておりません。申し訳ございません。

〔訂正〕

p.49 6行目 (誤) ※肺湿潤…→ (正) ※肺浸潤…

p.67 図17 (誤) 『日支国語辞典大辞林』→ (正) 図17 『日支国語辞典新辞林』

p.178 ②企画展開催時の総来館者数 表中の開催期間

(誤)		(正)
2017/11/22～2019/03/31	→	2017/11/22～2018/03/31
2019/11/21～2019/05/11		2018/11/21～2019/05/11
2019/11/20～2020/03/31		2019/11/20～2020/03/31

## アクセス

### 小田急線「生田駅」から来館される場合

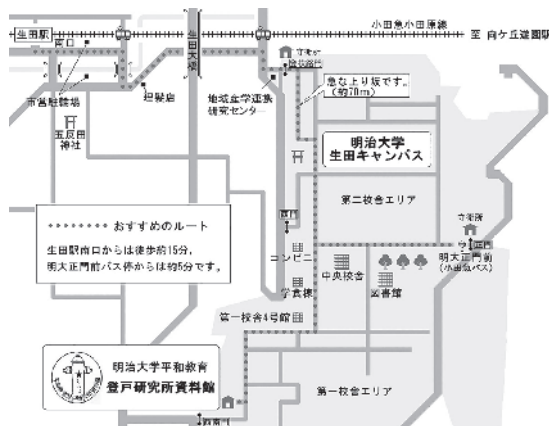
南口より徒歩 15 分

※地域産学連携研究センターからエレベーター・エスカレーターをご利用いただけます。（日・祝除く午前 8 時～午後 6 時半。運転時間等については今後変更になる場合がございます）

### 小田急線「向ヶ丘遊園駅」から来館される場合

北口から小田急バス「明大正門前」行きに乗車し、終点で下車

※外来者用の駐車スペースがありませんので、お車での来館はご遠慮ください。



## 利用案内

開館時間 水曜～土曜 午前 10 時～午後 4 時

入館料 無料

休館日 日曜～火曜、8月10・12日、年末年始（12月26日～1月7日）、入試実施日

※その他大学の都合により、臨時休館になる場合あり。

## 団体予約について

団体見学（10名以上）の場合は、事前申し込みが必要です。

見学希望日の1か月前までに電話またはEメールにてお申込みください。

団体見学に関する内容や受け入れ人数についてはご相談ください。

※団体見学に限り、日曜日の見学予約を受け付けております。希望される場合はお問い合わせください。

※団体の重複等により予約をお受けできない場合があります。

明治大学平和教育登戸研究所資料館

〒214-8571 神奈川県川崎市多摩区東三田 1-1-1 明治大学生田キャンパス

TEL/FAX : 044-934-7993

E-MAIL : noborito@mics.meiji.ac.jp

URL : <https://www.meiji.ac.jp/noborito/>

twitter : [https://twitter.com/meiji\\_noborito](https://twitter.com/meiji_noborito)

facebook : <https://www.facebook.com/Noboritoshiryokan>

instagram : [https://www.instagram.com/meiji\\_noborito/](https://www.instagram.com/meiji_noborito/)

明治大学平和教育登戸研究所資料館 館報 第7号 2021年度

2021年9月30日 発行

編集兼  
発行者

明治大学平和教育登戸研究所資料館

〒214-8571 神奈川県川崎市多摩区東三田 1-1-1

明治大学生田キャンパス

電話 044 - 934 - 7993

印刷所 ヨシミ工業株式会社